

源空和讃講義

平成元年九月講義

眩劫多生のあいだにも
出離の業縁しらざりき
本師源空いまさずば
このたびおなしくすぎなまし

細川
巖
述



一、 眩劫多生のあいだにも

眩劫已来

法然上人和讃の初めの三句、「本師源空世にいでて」「智慧光のちからより」「善導源信すすむとも」は、三句共に、全般の人が法然上人のお徳を蒙ったという讃嘆であつて、第一首目は「日本一州ごとごとく浄土の機縁あらわれて」「法然上人のお徳を蒙った、第二首目もそうであり、第三首目は、「片州濁世のともがらは」と言つて、小さな島に生まれて、島国根性、対立意識の強い人たちが、濁世の中で真実の教えを教わつたのは本師源空のおかげであると、そのように、全般の人がお徳を蒙った讃嘆になつてゐる。

しかし、第四首目は一転して、自己自身に約して師のご恩を讃嘆している。「このたび空しく過ぎなまし」というのはご自分のことを言つてゐる。

「眩劫多生のあいだにも」ということから始まつてゐる。眩劫は、「眩」は遠い、久しい、また空しいという意味もある。

「劫」は長い時間、カールパという。「四十里四方の岩が三年に一度、天人の羽衣で撫でて磨り減つてなくなる」という譬えであらわす。「多生」は生まれ変わり死に変わる流転輪廻を言う。眩劫という言葉を非常によく使つたのは善導という人です。

親鸞聖人は善導大師から眩劫ということを学ばれたと思うのですが、一番よく使われたのは、機の深信、自分の自覚を表わすところですよ。

「二つには深く、自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、眩劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あること無し」

(十二の五十九)

とあつて「眩劫已来、常没常流転」という。はじめは「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」と出てゐる。深い自覚があつて、その次に「眩劫已来」と出てゐる。善導は、遠い遠い長い過去、しかしそれが本当に空しい過去であつた、それを眩劫已来と使つてゐる。

『玄義分』のはじめ「帰三宝偈」(九の十六)、

「我等愚癡の身にして、眩劫よりこのかた流転せり。

今釈迦仏の末法の遺跡、弥陀の本誓願、

極楽の要門に逢えり。」

今本願に遇うた、そこに「我等愚癡身 眩劫来流転」ということがある。これは胸を打つ言葉である。

『般舟讃』には、

「眩劫より已来 苦海に沈みて

西方の要法 未だ曾て聞かず」

このようにあつて、「眩劫已来」は善導の教えを見るとくり返し頂いておられることがわかる。そこに共通していることは深い自覚、同時に深い目覚め。機の深信と、四十八願が衆生を摂受したもうということが裏表になつてゐる。機の深信と法の深信があつて、その機の深信のところに眩劫来流転という言葉が出てゐる。

しかし、善導に先駆けて道綽にもある。

「第二には諸の菩薩ありて、自ら云わく。我暎劫より已来、世尊、我等が法身・智身・大慈悲身を長養することを蒙ることを得たりき。禅定・智慧・無量の行願、仏に由りて成ずることを得たり」

「第三に、諸の菩薩有りて復是の言を作さく。我因地に於いて悪知識に遇うて波若を誹謗して悪道に墮しき。無量劫を逕て余行を修すと雖も、未だ出づること能わず」(十二の八十八・八十九)

「暎劫ではないが無量劫とあります。同じことです。因地は迷いの世界です。悪知識に遇って仏教の智慧を無視して悪道に墮ちていました。そこに長い長い間いて、余行、念仏以外の行を修してはいたけれど、それを出ることができなかった。是は『安楽集』です。」

このように「無量劫」が出ている。だいたい、道綽・善導を通じて言われている。従って、道綽禪師が言われたことを善導がさらに自己の問題としてあげられている。そういうところに、暎劫已来という問題がある。長い長い過去、久しく空しかった過去。そういうことを言うところに使っている。もつとも道綽は、長い間お育てを蒙ったというところにも使っている。他のところは空しい時間を言うところに使っていることが多い。

活命と生命

今聖人は、「暎劫多生」ということを言われている。これは長い時間ということである。では、長い時間を考えるのはどうい

うことか。私たちには、「活命」といういのちと、「生命」といういのちと、二つのいのちがあり、合わせて生活という。「活命」というのは食べて生きるいのち、「生命」は生きがい、生きかえる、誕生する、本当のいのちである。

「活命」は仏教用語としては、食べて生きるための仕事をすることを言う。

邪活命というのがある。邪よこしまな間違った仕事をして食べていくことである。正しくない職業である。たとえば泥棒、自分の命をつなぐために人のものを盗る。あるいはギャンブル、人に迷惑をかけて、それを職業にしている。これらが邪活命である。それらは生産的なものではない。

生きるために食べる、食べるためにいろいろのことをしなければならぬ、そのことで一生を終わる、この活命という生き方の中では、暎劫已来流転ということは出てこない。昨日と今日と明日で生きている。「昨日はすんだ、今日頑張らなければいけない、今日足りなかった、それなら明日しつかり頑張つて」ということで、明日、明日と、現在を足場にして、この次何をしようか、と未来の方を考えている。

だいたい考えることができる先は三年くらいでしょう。今、小学校に入ったばかりのわが子の大学のことを考える。考えないほうがいいですね。それはだいたい当たりません。

試みに、昭和十年という時点に立って昭和二十年を考えて見ましょう。これは誰一人として当たらなかったでしょうね。

昭和二十年は日本国中空襲で丸焼けになって、ついに八月十五

日全面的に無条件で降伏したのです。昭和十年はそういうこととは思いませんよ。

昭和二十年の段階から昭和三十年。これはまた考えられない。同様に、平成元年の今日から十年先を考えるのはとても無理です。考えないほうがいい。

それでは先のことはできません。そうですね。だから中期計画ですね。五年先です。それでもよくわからない。事業をやる人はそういうことはよくわかっている。そこで三年ほど先までを一生懸命に考えるのです。

私は企業は経営していませんが、小さな財団法人の創立者で、いろいろ相談に預かるほうですから考えますね。やはり五年先ですね。それ以上は考えないことにしています。過去のこともほとんど考えません。「しようがなかった」と言わねばならんことばかりという感じですよ。

ドングリのいのち

活命は現在が忙しい。たとえば、ドングリにとって、親木から生まれた時には厚い殻があつて、その中に胚芽がこもつていて、その殻と実が活命。ドングリは、ドングリころころどんぶりこ、と転がって、どうしたら虫に食われないように、格好がいいように、腐らないように、なんとかドングリとして自分を守っていかねばならない。そういうことに一生懸命になつていく。ドングリとして生きていくための方法を考へている。これを活命という。

しかし、それだけが満足されて、ドングリがドングリと一緒に、グループをつくって元氣よく生きていく、商売繁盛、そのような生き方はそのうちに時が来て終わる。ドングリはそのようなために生きていくのか。そうではないのではないか。

与えられた胚芽といういのち、そこに、ドングリとしてのいのちではない、もう一つのいのちがある。これが本当のいのちである。これが本当に生きるためには、光と水と熱を吸収して、胚芽が伸びて、殻を破つてでなければいけない。すると、一本の苗木になり、大きな木になつていく、それがドングリの本当のいのちではないのか。

格好よく生きていく、或いは誰かと生きていく、或いは腐らないように生きていく。そういうのはいずれ終わりである。それより胚芽のいのちが大事である。胚芽のいのちとは何か、それは仏性と言ふべきであろう。仏性とは何か。親鸞聖人はどうおっしゃったか。

「涅槃をば、滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性すなわち如来なり。この如来微塵世界にみちみちてまします。即ち、一切群生海の心にみちたまえるなり。」(二十の七)

本当に我々の中に満ち満ちてくださるものがある。それがこの殻を破つて生まれ出るべき種である。そこにいのちがある。如来から賜つたと言ふべきものがある。しかし、これはド

ングリの中の胚芽と同じようなもので、これだけではどうにもなりません。

ちようど胚芽が、光（光は如来の教えである）、水（水はそれを伝えるよき師よき友のはたらきかけである）、そういうものを待つて、初めて動き伸びていくように、このいのちはこのままだとそのままでもわが一生を終わる。

時を殺す者

信国淳という方がおられました。フランス語の先生で、大谷大学でフランス語を教えておられた。そして専修学院の院長を長くしておられ、他所に出られなかった。いつも寮生を相手に、いろいろと相談に応じ、話をしておられた。専修学院から非常に多くの人材が出られた。こないだ来られた竹中先生や児玉曉洋先生は、専修学院で信国先生から教えられた方ですね。信国先生という方は、曾我量深先生と安田理深先生をわが師として聞法された方です。

その方の『いのちみな生きらるべし』という本を読みました。「時を殺す者」ということばが出されてあります。信国先生はこの言葉に出会って愕然としたという。「自分は時を殺していました。せつかく与えられた時を、食べていくために殺してしまっていた。フランス語など勉強して仏教はしなかった。それを仏教用語では「空過」というのであると知った」と、この書物の初めに出ている。そこから求道を始められたわけですね。

その後「デラシネ」ということを言われた。デラシネとは根こそぎされている者。自分はデラシネであった、如来の大地

から引き抜かれて、ポイツと放られて、生きているままで死んでいる、親を失った子供であった、と。要するに、ドングリだけで生きているものは、根無し草であり、根こそぎされた者であり、時を空しく過ぎていく者である。

眩劫来流転せしめるもの

このあり方では、「眩劫来」は出てこない。これに光と水を与えられ、とうとう双葉を切つて殻を破つて出た時に、そこに眩劫来ということが出てくる。眩劫来ということは、いのちが本当に充実し、はたらきを持ち、満足され、殻を破つて出てきた時にわかるのである。その時、眩劫来、長い長い間、流転していた、「我等愚癡身 眩劫来流転」ということがわかるようになる。

それは、活命だけで生きていく者にくら言ってみてもわからない。たとえ聞いても印象に残らない。けれども段々と仏法を聞いていくと、長い間、闇に包まれていたのだとわかつてくる。

眩劫来流転という言葉は、人生空過の我をして本当の時を得た、生かしていただいた、私が無量の御いのちに生かされる、あるいは、無量寿が届いて、眩劫来常流転と知る。眩劫というところに、長い長い間の人生空過がわかるようになる。

眩劫ということ言うのは、ある程度の年齢にならないと言えないような気がしますね。三十歳では言えないでしょう。四十でもどうか。六十、七十くらいにならないとわからないのではない。それは、自分の身の上に、無量寿・無量光を頂

いて、自分の闇がわかるからである。無量寿・無量光、即ち南無阿弥陀仏、即ち弥陀の本願、本願の名号、その教えを聞き開いていくと私という者の長い闇、深い闇がわかってくる。

光というものは闇を破るのではないか。そうなのですが、闇というのは破られることによって闇ということがわかる。亡くなられた大森先生は、自分は今まで光明によって闇は破られるということを書いてきた。光は闇を破る。しかし、破られた彼方に破られない闇があるのだ。その闇を見出す者こそ光である。これは非常に深い教えである。

そこに眩劫已来流転ということがある。具体的には深い闇、なくならない闇がある。それがあから流転せざるをえない。そういうものを抱えているのである。

それは何か。やはり五逆と誹謗正法ということになるでしょう。闇が破られて、その先に、さらに深い闇を見出す。それが念仏の種なんです。念々称名、懺悔せざるをえないものを持つている。謗法、仏智疑惑、如来無視、如来を無視し、仏法を無視して生きている自己を見出す。これが眩劫来流転の根源である。根源がわかってくると、眩劫来ということが見えるようになる。

善導の信心は実に深い。この人が初めて信心を明らかにした。即ち信心とは二種深信であると初めて言ったのです。その前は道綽ですね。善導は道綽に教えられた。実に深い信心が表われて、それを受け継いだのが法然、親鸞です。そこに眩劫来ということがある。眩劫来常流転である。この私が眩劫

より已来、深い深い仏の長養を蒙っていた。このことを喜んでおられる。

自己の深い闇を見いだす

善導に帰って、少し言っておこう。善導の『往生礼讃』の終りのほうにある「日中懺」。日中というと午前十二時に礼拝懺悔をする。

「我れ、発露し懺悔したてまつる。無始より已来乃至今身まで、一切の三宝、師僧、父母、六親眷属、善知識、法界の衆生を殺害せること数を知らず。」

発露とは投げ出す。発は開き、露はあらわにする。私が今まで隠しておりましたことを全部投げ出し、如来の前にお詫び申し上げるのでございます。私は眩劫已来、今に至るまで、仏法僧を殺し、師僧を殺し、父母を殺し、六親眷属善知識を殺し、法界衆生を殺してまいりまして、その数を知ることあたわず。

以下、「一切の三宝師僧父母六親眷属善知識法界の衆生の物を偷盗せること数を知るべからず」。さらに、一切のこれらの人に「邪心を起こせること数を知るべからず」。「妄語をもつて欺誑せること数を知らず」。綺語・悪口・両舌、そういうものを挙げています。

そして

「是の如きらの衆罪は、亦十方の大地の無辺に微塵の無数なるが如く、我等が作る罪も亦無数なり。」

「是の如きらの罪は、上、諸の菩薩に至り、下、声聞縁覚に至るまで知ること能わざる所なり。唯だ仏と仏とのみすなわ

ち能く我が罪の多少を知りたまえり。今三宝の前、法界の衆生の前において、発露懺悔したてまつる。」

(真宗聖教全書六八〇頁)

これが『往生礼讃』の最後になっている。善導はこのような深い懺悔をした。懺悔とは何か。自己の罪を見出して、それを如来にお詫びすることを言っている。

この人が、このような殺生とか偷盗とか、以下略しましたが、破戒とか、そのようなものをしたかというのと、そういうことはあり得ない、おそらくそういうことはなかったと思います。しかし、この人はそう言っているではないか。そういうわけですね。武器をとって殺したということはないが、心にそう思った時があるというように、心に思ったことを言っている。

沢山たくさんの罪を犯した。それは無始よりこのかたの罪であった。ではどうしてこのような言葉が出るのか。礼拝・讃嘆、それが懺悔になるのである。如来のおこころを頂いて、それを礼拝し、一心帰命、そのお徳を讃嘆する。讃嘆は念仏。如来のおこころを頂いて、ついに念仏する。そこに生まれる自己の闇への自覚。深い闇を見出した。闇が見出されることが闇が破られること。その先にさらに深い闇がわかるようになる。その眩劫来流転の原因というのがわかる。ここから起こってくるのである。

これを挙げたのは、善導という人が眩劫来流転ということと言っているが、別のところではこのような姿で懺悔している。要するに眩劫已来というのは、人生の世間的な面を右往左往しながら、ドングリころころやっているところでは出てこない、

深い成長を遂げたところで出てくる言葉である。自分の罪というものを見出した者、そして自分の深い闇を見出した者が、眩劫来流転という懺悔を持つのである。

「眩劫多生のあいだにも出離の強縁しらざりき」というのは、眩劫来流転、我等愚癡身ということを言っている。我々は無量のいのち、永遠にして久遠なる光を頂いた時に、眩劫来という言葉にだんだんと心惹かれるようになる。その時、この言葉が自分の言葉になっていく。はじめは眩劫来とはとても言えない。けれども、だんだんあなたが自分の闇がわかってきたなら、この言葉にだんだん関心を持つようになるだろう。本当にそうだとと言えるようになるだろう。

その時あなたは、真の意味で無量寿に生きているのです。無量寿・無量光に生きています。無量寿・無量光に生きればこそ、眩劫来という言葉が領けるようになる。善導によつて聖人はこの言葉を頂かれたのであろう。

道に立ったものの思い

源空上人の和讃を頂いて来まして、既に三首を頂戴したところであります。初めの三首の和讃は、或いは「日本一州ことごとく」と言い、或いは「片州濁世のともがらは」と言つて、多くの人たち、全体の人たちについて、法然上人のお徳が広まり、そのお徳をみな蒙つたということが述べられている。

第四首は、私一人、すなわち親鸞聖人ご自身の上に、師のご恩を蒙つたということが言われている。私が眩劫多生のあいだにも出離の強縁を知ることがなかった、まことに本師源空、

法然上人のお陰を蒙って出離の縁を頂いた、もし本師源空いままさずばこのたびも空しく過ぎて、生死流転を続けていったであらうと、御自分の上に頂かれた師のご恩を讃嘆される、そういう一首になっている。

眩劫という言葉は善導大師によると思われますが、その前に道綽がいる。

「第三に、諸の菩薩有りて復是の言を作さく。我因地に於いて悪知識に遇うて波若を誹謗して悪道に墮しき。無量劫を逕て余行を修すと雖も、未だ出づること能わず。後に一時に於いて善知識の辺に依りしに、我を教えて念仏三昧を行ぜしむ。其の時に即ち能く併せて諸障を遣り、方に解脱を得たり。斯の大益有るが故に、願じて仏を離れず。」(二十一八十九) 『安樂集』の中、『大智度論』龍樹の教えによつて、菩薩が仏を念ずる、そのわけがらを言われる三番目に出ている。諸の菩薩、道に立つものは皆こういう思いを持ち、このようなことを言うのである。

私は因地にあつた時に、悪友悪知識に会つて、波若すなわち仏法の智慧を誹謗し、悪道に墮しておりました。その時、無量劫を経て、眩劫多生のあいだにもいろいろなことをやつて来ましたが、とうとう迷いの世界を出ることはできませんでした。後に、ある時、善知識の辺ほとりにあつた時、念仏三昧を教えて行ぜしめてくださいました。その時ようやく諸の悪業・諸障を断ち切つて、迷いの世界を出ることができたのです。もしあのよき師よき友にお会いすることがなかったなら、定めて今もま

た迷いの世界の中を流転しているに違いない。この善知識に会つたからこそこのようなことになったのです。

菩薩は皆このように思う。「長い長い流転でありました。よき師に会わなければまだまだ流転を続けていたに違いない。教えに会うことがなかったなら、今頃はまだ人生の表面を這いずり回っていたに違いない。」これを「眩劫多生のあいだにも出離の強縁しらざりき」という。

そういうところを言っている。この文章で言えば、「無量劫を経て余行を修すと雖も、未だ出づること能わず」、「無量劫を経て」というところに「眩劫多生」ということがある。

これは、無量劫を経て未だ出づることのない、その中ではわからないのです。出てわかるわけである。そして、もしあの方にお会いすることがなく、この教えにお会いすることがなかったなら、今もなお流転往来していたであらう、こういう思いを菩薩はことごとく持つのである。

これが第三に挙げてある。第二の方は長い長いお育てであつたということが出ている。第三のほうは、もしこの方に会わなければ、なおもまた眩劫多生のあいだにも出離の強縁しらざりきと、流転していたに違いないという感銘が出ている。

悪友悪知識

その眩劫多生、道綽禪師は、「無量劫を経て余行を修すと雖も、未だ出づること能わず」というふうに言っておられますが、その理由は何か。「我因地に於いて悪知識に遇うて波若を誹謗して」と言われている。

悪友・悪知識とは何か。それについて聖人が深く言われているところがある。

まず、悪友、それは二河白道の群賊悪獣のところである。善導は群賊と悪獣を分けなかつたけれど、聖人は『愚禿鈔』において分けて言われる。

「群賊とは、別解、別行、異見、異執、悪見、邪心、定散、自力の心なり」(十四の三十二)

悪見までは外の人を言っている。外道や自力の人、そういう人たちが私の相談相手になり、私の友であった。また、定散心、自力の心。内にも私の相談相手、私の一番親しい友は、いわゆる理想主義の心、定善散善自力、そういうものにとらわれて、かくあらねばならん、かくあつてはならん、そういうはからい多い理想主義の心が私の親友であった。

「悪獣とは六根、六塵、五陰、四大なり」(十四の三十二)

悪獣というのは、私の悪獣性、煩惱を言っている。四大は私の肉体。六根は眼・耳・鼻・舌・身・意という、外部に対する感受性。五陰というのは、色・受・想・行・識という私の身と心の全体を言っている。私の肉体的性、身体性。心身の欲求、それを私は友として、それに相談して、それと親しくしていた。それを詐親者という。

群賊悪獣は別に教えを説くわけではない。私が目覚めないうちに、私の相談相手となり、この人と相談して、私が行動してきたわけである。私が小さい時から相手にできてきている者である。これに遇うて波若を誹謗し、即ち仏法を嫌い、離れ、謗っている。そこで何をやっても悪道に墮している。

しかし私は何とか道を求めていこうと思つて教えを請う。

その人がまた善知識ではなく悪知識であったがために、「無量劫を経て余行を修すといえども、未だ出づること能わず。」こういう結果に終わった。教えを説くほうを悪知識という。

悪知識については『十住毘婆沙論』『四法品十九』に龍樹菩薩が言っている。『愚禿鈔』の「悪知識とは」(十四―三十二)に該当する。

「仮善知識」、善知識のような格好ですが、仮である。「偽」いつまり。「邪」正に対する邪。「虚」むなし。「非」「悪」と言う。この中では、「仮善知識」「虚善知識」そういうものに相当するだろう。

未だ仏法あるいは教えというものを求めない段階は、私の相談相手は群賊悪獣である。自分が求道して行こうとなると、今までは詐親者、いつわり親しむ存在で私の相手だったわけですが、代わつて群賊悪獣になって、後から追っかけてきて、私の求道を阻害し、殺そうとする。そういうところを二河白道で非常によく言っている。

少しずれますが、二河白道は非常に大事な譬えで、信心というものはどういふふうにして得られるのであろうか、本当に人間の上に信心が成立するにはどういふプロセスで進んでいくのか、ということが非常によくできている。

親鸞聖人は二河白道を全部『教行信証』の信巻に挙げ、なおその上、『愚禿鈔』の下巻というのは、二河白道に関するところが非常に多く、長く頁数を割いて、非常に親切な注を施している。

教えを請うということになって、教えを請うているのだけれども、その教えを教えてくれる人が悪知識ということがある。悪知識と言ってもいろいろあつて、「仮善知識」「偽善知識」という内容にあたると思っています。本物ではない。

四種悪知識

(1) 師を持たず小欲小事

「辟支仏乗を求めぬ心を持つて、小欲小事を樂う。」

(十住毘婆沙論四法品)

辟支仏乗、乗は乗り物、教え。辟支仏はサンスクリットで縁覚とも言う。小欲小事を樂しむ、縁覚は十善業を修すと言います。不殺生・不偷盜・不邪淫以下、十善業を修め、縁に触れて、無師独悟、それを縁覚という。

普通の人と違うのは、師を持たなかったところ。師を持たずして教えを聞くということがあるわけです。我々の先生も善知識について教えを頂かれたということではない。では何もないのかと言うとそうではなく、親鸞聖人の教えに直接触れられたというか、『歎異抄』を頂いて、ある機縁に遇つて開かれた。そういうのは縁覚とは言わない。

そこに一切法障というものを持つ。一切のものから、一般に言えば人ですね。一切の人に平等に接することができない。それを法障と言う。慣鬧を悪むと言う。慣は愚か、鬧はさわがしい。そういう人をにくむ。十善業を修して無師独悟という人にはエリート意識ができる。俺はやった、そういうものが

あつて、独覚とも言う。我は得たり、と思う。師なくして悟りを得る者の陥る落とし穴なのです。

師によつて教えられた者は、我は得たり、ということはないのです。与えられた、育てられた、教えて頂いたということがあつて、そういうところに非常に謙虚なものができているのですが、無師独悟は、その点「得た」という思いが強い。非常に自信がある。宗教の世界もそうですね。普通の世界もそのようになります。

独学という人もある。一人でコツコツと勉強し資格を取つた人もいますし、ある段階に達した人もある。一方学校で、あるいは先生について教えられた人もある。そうすると差がありますね。特徴があります。独学の人は必ずものすごい自信を持つています。自信家が多い。エリート意識が強い。俺はやつたという思いがあつて、自説をなかなか譲らない。そういうところが違う。

宗教の世界もそういうところがある。ぼくもそのような人に会つたことがあります。この人はお経の解説や信心のあり方について自信型ですね。ものすごい自信を持っています。ぼくの言うことなど聞かない。この人は独学者だと思ひました。

有名な話としては亀井勝一郎という人がある。暁鳥敏という先生にお会いした時に「君は師を持たんな」と言われた。或いは「師を持たない人だな」と叱られた、と書いているところもあります。何度も出てきます。暁鳥先生から言われたことは亀井さんはこたえたわけですね。

そこで私は考えました。なぜ暁鳥先生という人は亀井勝一郎という人をそのように喝破かつぱしなされたか。亀井さんは亀井さんで「自分は得た」という思いがあるわけですね。暁鳥先生は、この人のほうが歳が多いですから、若い人に言つてあげようと思われていたのか、これは私の想像ですが「先生はそう言うわれませんが私はこう思います」と、亀井さんは受け付けなかったのではないか。そこでわかるのです。ああ、この人は独覚だなと。

人の話をしているのではありません。私たちは独覚になりやすいのです。人の話が聞けない。人の話にうなずけない。人と私は違う、というものがある。そうではない。「われ以外すべて師」。これは吉川英治の言葉です。これは本当ですね。

一切のものからにおいて妨げられる。憤悶けんぼん、愚かで騒がしい者をにくむ。自分の言うことを聞かない人は特ににくむ。騒がしく自分の自説を言う人を嫌う。自分の言うことをよく聞いてくれる人が好きなのだ。それ以外全部嫌い。

我々もそういうところがあります。自分の言うことを聞いてくれる人がありがたい。自分の言うことを聞かない人がいる時、我々は教えられるのである。それが大事。教えられて、私というのはあのような姿であるかとわかり、私自身が教えられるのに大変なご苦労をおかけしているということがわかる。懺悔の種になり、念仏の種になり、有り難うございませすとご恩を感謝する種になるのが、一切法障を抜け出す道ですね。

小欲小事を楽しむ。人々にご法を伝え、お念仏の道を教えていくということは、大欲大事なのです。これは大変なこと、大

ごとなのです。自分が一人楽しむならば、仏法は楽なものです。自分で朝起きて仏前に参り、お聖教を頂き、南無阿弥陀仏と喜び：・・・楽なものですよ。すべてのものを受けとめて念仏し、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、何が起ころうと一つも構わない。それは欲がない。小欲です。欲というのは願いです。どうしてもこの道を人に伝えたいと思つて御覧なさい。大変ですから。自分一人があらゆることを受けとめて念仏すればいいというものではないですよ。

それは、未熟な人のためには読書会を開く、今度は二世の会があつたそうですね。本当にご苦労です。二世・三世というのはなかなか難しいですからね。大変な時間と努力を費やし、先生方をお願いしてこないといけない。大きな願い、大ごとなのです。

しかし、そういうのは楽しまない。そういう人に育てられたら、自分もそうなる。そういう人を悪知識と言う。

住岡夜晃というお方は、終戦の前後、大変な食糧難、経済的にも厳しい時代でしたが、そういう時に、沢山の人を預かつて、それでも、本部に入つて仏法を聞くと喜ばれるわけです。本部のほうではおそらく食べ物はないし、大変な時代で、前のほうは畑や空き地でしたから。本部の人たちが一生懸命野菜を作る。それはもう・・・。

人を集めて仏法を伝えようというのは、これは大変なこと、実に大ごとなのです。それを大ごとと思わないというのは、願いがあるからです。そういうものを持たないものを縁覚・独覚というのである。自分が正しいと思ひ、自信過剰である。

(2)心の安定を求めぬ

「声聞の比丘を求めて、座禪を樂う者。」

声聞もまた十善を行ずる。こういう人たちは人間として非常に優れている。こういう行ができるというのはものすごく優れた人です。小乗の行をする人は日常生活はものすごく優れている。大乘の菩薩とか言うけれども、足元にも及ばんようなものがある。

声聞も辟支仏も優れた人です。現代で言えば、ビルマとかタイとか、そういうところで出家得度し、僧侶としてやっておられる人は、日常生活となれば、これは足元にも及ばんものがある。非常に優れています。

けれどもそれを善知識と言わないのです。なぜか。自分は優れているが、そこでとまっている。仏法を伝える力を持たない。そこで「仮」或いは「虚」でとまるのである。善知識として悪いということはありません。けれども、本当の善知識とはならない。

声聞乗というのは座禪を樂しむ。十善業も修めて、他の音声(教え)に随順し、行ずれども(十善業)、自らに智慧を生ぜず。智慧というのは同時に慈悲であつて、従つて、他に対してはたらきかけて仏道に勧めるといふことができない。座禪を樂しむ。定善、禪定の心、心の安定を保とうとして、それに集中するのである。

我々もそういう声聞の時代、或いは縁覚の時代というものがある。声聞の時代というのは、教えを一生懸命聞いてそれを実

行する。そういうことが私のいのちであつて、人のことまでまだ手が出ない。智慧ができないから慈悲の心もないし、愛情もないし、自分が精一杯。それでは自分がよくわかつているかというところでない。

禪定という。心の安定をたもつ。我々の言葉で言えば、自分の信心をかき乱されまいとして努力する。世の中には信心をかき回すようなことが沢山ある。家に帰ると家内が言う「隣に猫が三匹生まれた」と。なるほど・・・。「あの人がきてこういうことを言うた」、そういうのを聞いていますと、「お前はいらんことばかり言うな」ということになる。わしの心をかき乱すな、と。

せっかく今ありがたい気持ちになつて喜んでゐるのに、それをかき乱すことばかり言つて、現実の世界に引き戻すと、それにこだわるわけです。これを禪定を樂しむという。もう少し言えば私の信心、ありがたい、よかつた、と思う心を保とうとしてゐるのを足元から引きずつていく。私の心の安定を乱すわけです。

一切法障と禪定障。この二つをもつて、辟支仏乗と声聞乗を求めぬ人の障りを言うのであります。菩薩、本当の教えを聞き抜いた者はどうか。皆同じことなり、自分が最下の凡夫と目が覚めたら、皆同じことであると分かる。

「海河に網をひき釣りをして世を渡る者も、野山に猪を狩り鳥を捕りて命を繋ぐ輩も、商いをし田畠を作りて過ぐる人も、ただ同じことなり。さるべき業縁の催せば、如何なる振舞いもすべし」(歎異抄十三章)

とわかる。

やはり、これらは自己に執する心、一つの貴族意識、自分は優れている、という貴族的・エリート意識、自我意識、俺が、俺が、という意識を離れない。そういうところがもう一つ徹底しないものを持っている。

(3)外向きな心の人

「好んで外道の路加耶経ろかやを読み、文頌もんじゆを莊嚴し、問答に巧みなる者」。

外道の路加耶経とは、バラモンその他の仏法外の人達が書いた書物いい、それを特に好んで読み、文頌、文章や、莊嚴というのは大体作るという意味です、文を書き、歌を作ることに熱心で、論議問答が非常に好きな人である。そういうことを第三にあげています。

論議問答というと、やはりそれに勝とうとする心、相手を言い負かそうという心、自分の主張を認めさせようという心があつて、やはり外向きである。

名聞が主であり、文頌、文章や歌を作るとなると一つの表現あるいは芸術的な心というものがある。外道の経典を好むというのの一つの好奇心、あるいは外向きの心がある。外向きの心というのは、世間心、また名聞・利養・勝他である。

蓮如上人の御文章を見ると、その御晩年八十四才か五才の頃、自分は今まで歌や花やそういうものに力をこめる時がなかった、そういうことを一生懸命やっておられたらある程度上達さ

れたお方であろうと思いますが、そういう世間のことに力を入れる暇がなかったと、御文章のどこかに書いておられますね。亡くなられた先生は、「念仏して自己を充実し、国土の底に埋もるるをもつて本懐とする」ということを教えられた。

今度の師恩会の総務を務めた亀岡君は、最後に総務としての自分の感想を述べた時「ああいう時代、即ち昭和二十年、敗戦の真只中に落ち込んでおり、又今から世間的にすっかり立ちなおらなくてはいけない時に、そういう言葉を言われた、それはありえない言葉である」そういうことを彼が述べてお礼を申した。亀岡君としては大きな感銘があつたわけですね。

あの人は豊平の原村の出身で、先生と同じ広島師範学校に入つて、同郷でもあり、同学でもあり、先生が非常に注目されておつた。とうとう広島師範を出たたった一人の同朋として現在やつてくれている。そういう感銘があつたのだと僕は感じましたね。

それと反対なのです。国土の底に埋められるとか、念仏して自己を充実するとかというのとは反対に、外側の方に向いて、いろいろと研究し、それを好んで、それと比較する。あるいは自分自身の思いを色々と言つて出す。

莊嚴というのは、中村元という人の『仏教語大辞典』を見ると、建立、装飾、ということだと書いてあります。論議問答は外向きの方にいく。内向きの反対である。

(4)法の利を得ることができない

「親近する者、世間の利を得て法利を得ず」。

これが大事なところです。親近は親しみ近づく、同時に必ず恭敬、相手を敬い、お徳を尊敬し、そして色々の物を差し上げ、その教えをしつかり聞きぬく。親近は恭敬であり、恭敬は供養である。こういうふうが続く。

その人に親近する者が、世間の利、名聞・利養・勝他、世間的に有名になり、ポケットも膨らんで、人をしのいでいろいろな面で活躍する。そういう名聞・利養・勝他の人が生まれてくる。けれども法の利を得ない。

法の利とは何か。法の利の一番先端は信心です。信心成就し本当の人が生まれ、そして信力増上していく。その結果、現生十種の益と言われるような信心の利益が与えられ、そしてついに往生浄土していく。そういう解脱の人が生まれる。本当の人が誕生する。それが法の利である。

法はダールマと言ひ、昔の訳では軌持ぎじの義ぎというのがあつて、軌は道、持はたもつ。その人を軌たも(道)に持たもち、その人を本当にその人として成り立たせる。そういうのを法という。その法が届いて利益が与えられるのを法利という。

それは信心成就ということに極まる。そしてその信心が増上していく。その人に近付くところの者が法利を得る。これが本当の善知識である。そうであるのに、その人のところから本物が誕生せず、本当に深い信心の人が生まれず、世間的に名聞・利養・勝他の人が生まれて来る。実に悲しいことである。そういう人を悪知識という。

その人に就いて行を修したけれども結局本当に解脱の世界に出ることができなかつた。そういう人を悪知識という。そ

ういう人によつて、迷いの世界に長くどまつて、波若はにやを誹謗して、悪道に墮して、そこから出ることができなかつた。もしも私があの時こういうご縁を頂かなかつたら、一体どうなつた事であろうか。

それを「無量劫を経て、未だ出づること能わず」と言う。これはそういう世界を出て初めて言う言葉です。逆に言うとき我々は本当に迷いの世界を出ると、「眩劫多生の間にも、出離の強縁知らざりき」、長い長い迷いを迷つておつたなあとわかり、こういうご縁を頂いて有難いというものになつてくるわけです。

そういうことを善導が言ひ、善導に先駆けて道緯もまた教えられてゐるわけであります。聖人の眩劫多生ということは、そういうところから由来してゐると思われる。

四種善知識

善導大師は『安樂集』において、我々が迷つて未だ出づること能わずという原因を、悪知識に遇う、と言われた。

「其の時に、即ち能く併せて諸障を遣り、方に解脱を得り」。

(十二の八九)

解脱を得るといふのは、善知識に遇うたからであると言われています。悪知識に会つて迷ひ、善知識に遇つてその迷ひから出る。人と出遇うということが非常に大事で、法に出遇う、教えに出遇う、という前に、眩劫多生の迷ひといふのは人と関係があります。

四種善知識。これについては度々申したことがあるが、一応原文どおり書いてみます。

(1) 求道者を尊敬する人

「一に、来求する者に於いて賢友の想を生ず。能く無上道を助成するを以ての故に」。

来求するとは、ここに来て求める。即ち求道の人、そういう人に対して、賢友、よき友として、賢い本当に智慧のある友という想いを持つ。それを、四種善知識、善知識とはこういう人であるということを一先に、こう言っております。

無上道を助成し成就していく、そういう力があるからである。無上道、即ち仏道。私の仏道進展を助け成就する。又仏道を展開成就する。この二つがあるだろう。

求道してくる人が来ると、私が教えてやらねばならん、と指導者意識を持って対する、それが大体普通の考え方です。

このような末世の時代になると自分の所へ来てくれると、飯の種ができたと思う人もあるかも知れないが、そういうことでなしに、賢い友、知恵のある私の本当の同行善知識、それが得られた。そこには指導者意識がなく、自分の弟子という私有化が無い。それを賢友の想いを持つと言います。

『入法界品』の善財童子の求道というのを見ますと、その初めの方には特に優れた海雲比丘とか、何々菩薩という人が出て来られる。そこを善財童子は訪ねていく。

そうすると優れた徳を持った比丘が、この童子の問いを聞いて自分の座からすべりおりて、童子に向かって頭を下げて手を

ついて拝むところがある。謙虚な善知識というものを物語っている。賢友の想をなすという。

私の仏道を助成する。私とその相手によって色々教えられるところがある。考え方、受け止め方、実行の仕方、それらが私のマンネリ化を打ち破って、私に考えさせ、私にもう一つ深く求道を刺激し、私自身の進展を促すわけであって、私の仏道進展を助け、それを成就していく力になった。

まことに師は弟子によって育てられ、弟子は師によって養われていくのでありまして、どんな小さな子でも、やっていること、言うていることに、私を教えるものがある、そういう姿勢を持った人、それを善知識というのである。

又その人が今からここで仏道を本当に学んでくれて、仏道をたて、仏道を興し、世間に仏道を興隆する人が来てくれたのであると喜んで迎える姿、そこに求道者に対する尊敬と愛情を持った人が述べられている、それが第一の善知識です。そういう人に遇うてはじめて、無量劫を経て未だ出づること能わざるところから出ることができた。

(2) 法を説く人を善知識と拝む人

「二に、説法者に於いて善知識の想を生ず。能く多聞智慧を助成するを以ての故に」。

説法の人、法を説いてくださる人を善知識と崇める心を持っている。なぜかと言うと、その人が法を説いて、私の多聞智慧を助けてくださる。私もまたその法を説く人の教えを聞き、成長するわけである。又、世の中、人々のために多聞智慧を授け

てくださる、そういう優れたお方であり、仏法を興して下さるお方である、と感謝して、この人を善知識として拜む。

私は初め学校に勤めて仏法のお話を申し上げる機会があつて、教育界とか宗教界とかは、他の人よりもよく知っているように思います。世の中には嫉妬心というものがある。人の悪口を言う、その人にたくさん優れたところがあつても、当たり前のことのように言う人がある。

学校の先生とお寺の坊さん、これが世の中で一番嫉妬心が強い、こういうことを身に沁みて感じましたね。商売をしている人も嫉妬心がないとは言えないけれども、これらの人は歴然として結果が出るわけですから、負けてはならん、俺もがんばらねばならんということが先に立つと思いますが、この二つの世界の人は、そうはいかない。ものすごく嫉妬心が強い。自分もその中にいるのだから人の話ではありません。

その反対なのです。法を説く人は非常に嫉妬心を持つ。それを名利心と言う。名利にこだわる。岡部史郎君の話ですが、学者と話をしていると、最初の十分間は自分の業績を述べ立てる、その次の十分間はやたらと人の悪口を言う、それで話が終わってしまい、ほんとに味気ないと。説法者を善知識とすると、いうことは少なく、悪口を言うほうが多い。

本当の人というのは人の悪口を言わない。これは間違いありません。では全然批評しないかと言えば、そうではありません。間違いないことは言わなければわかりませんから、言うのは言うでしょうが、悪口は言わないね。

おそらくですね、あの人は近くこういうことを言っておられた、こういうことを書いておられたが、あれは大変ありがたかった、大変感銘しました、と。それを説法者に於いて善知識の想を生ずと言うのです。

私を教養育ててくれる人。われ以外ことごとく師。その人の言われたことに、謹んで「そうであります、有り難うございます」と感謝できるところに、善知識の想を生ずと言う。これは本当に出来にくいところ、難しいところです。

亡くなられた先生は、「法を説く者は常に自分の中に名利心を見つめていかねばならん」ということを、そのご晩年に法を説く者によく言われました。その反対を善知識と言う。名利心に追いまくられずに、頭を下げて聞くことができる。

(3)出家を称賛する人

「三に、出家を称讚する人に於いて、善知識の想を生ず。よく善根を助成することを以ての故に」

出家の人、出家得道と言って、昔は職業を捨て家庭を捨てて仏道に入っていく人を出家と言った。そういう人を見て称讚する。そういう人に対して深い評価を与えている。

本当にあの人はよかつたなあ、求道者になって出家されて、道を求めて行かれるが、本当に尊いことであると、出家する人を正しく評価し、誉め讃え、讚嘆する人。その人を尊敬し、その人をよき師よき友と仰ぐ心を持つ。そういう人が又、善知識なのである。

何故かと言うと、出家する人によって善根、仏道を求めている宿善というものが、養われていくのであって、そのことが仏道を求める人が生れる根本にあるからである。求道していく人をほめ讃える人、そういう人を友として頂くことのできる人を言っている。

現在の世の中では、いわゆるお坊さんと言われるような人の悪口を言い、けなし誇る、無視する。そういうことがたくさんあるわけですが、そうではない。今から先の時代に、本当に仏道というものを勧めていこうとするならば、出家する人がなければ、或いはすでに僧侶の服装をして世の中に生きておられる人がなければ、宿善が育たないです。お寺というものがなければ宿善は育たない、その宿善がなければ仏法は育たないのです。善根は宿善というように理解したほうが分り易いと思います。

宿善を涵養するということもとても大事なことです。畑で作物を作るには、先ず土を作らなくてはいけないとよく言います。

私が前に居た所の隣の人は、立派な菊を作る人でした。その人がやるのを見てみると、十二月頃までに木の葉を集める。そして一月、大きな穴を掘ります。私の背の高さ位ある穴にずーと入れて薄めて、三月頃ですかね、苗を植えて色々手入れをする。それを毎年やって、先ず土を作りなされる。これには驚いた。僕も野菜を作っていますから、専ら土を作る事に力を入れています。僕のは背の高さまでは掘らんけれど、最低四十七センチ。大体六十センチは掘っています。下の赤土が出るんですよ。赤土が出るまで掘る。そして堆肥を入れています。堆肥を三

か所、かなりの量を作っている。そのためにリヤカーを引っ張って枯れ草を集める。この頃は草を刈ってもほったらかしにしていますからね、それを集めて、私の所の枯葉も入れて、それから鶏の糞とか色々入れて作ります。だから元は赤土のべたべたした土でしたが、今は握るとさらさらさらさらしています。そうなるように出来た。

仏法の土を作るには、やはり出家していく人がなくてはならないのです。そういう人が形を持って教えてくれる所があり、寺というものがあってそこで鳴る鐘、それが人々の心に響きを与え、色々な新聞に仏法の会があるという記事が載る、それも又人々の心を養っていくものになるでしょう。

だから会がある時は出来るだけ新聞に出さなければいけない。広告する。「歎異抄の会、何日に、どこどこである」。新聞社に出すでしょう、そうするとただで催し物の欄に出してくれる。

ああいう広告はいらんと思うかも知れませんが、いやいや、あれを見て、仏法の宿善を養う種になるんです。あれを見て、「ああこういう世の中に、今、仏法の会があっているのか」と喜ぶ人はあるんです。又、「ホォー」と考える人もあるんだ。出来るだけやらなければいけない。

私は昭和二十四年に福岡に帰って久留米の学校に勤めて、二十五年か六年頃から大森先生に来てもらって、毎年一回か二回、会をやっていました。それは小さな会で、学生だけを相手にした、私の仏教会の学生だけでしたから、五・六人から十人位の会でした。

三年位した頃、先生が「一遍、一つ、大きく網を打つたらどうかな」と言われた。「はあ」と、そういうことに意味あるのかなあと思っただけで、先生がそう仰るから、二十八年だったか、久留米中のお寺にビラを張って、新聞にも出して、大きなお寺で三日間、会を開いた。

驚きましたね、二百人以上の人が来ました。今まで五・六人から七・八人でやっていたものが、そんなにも入って我われの会の方も自信を得た。仏教というものは、こんなにたくさんの方が求めなされるかと。向こうの人もこつちを知って、あんな若い学生が仏教を聞いているのかということでした。

それが大森先生が九州の方に縁が開けた第一歩だった。後に大森先生に継いで岡本先生とかお出でになりました。その頃は、大森先生と岡本先生とご一緒に呼んでおりました。

そういうことがあって、一遍は大きくやるということの意味がある。それは善根を助成するのです。

我われも、大体光明団というのは小さく固まっていますから、スケールは小さいです。それは決して悪くはない。それだけ忠実に内面的にやるということのも一つの行き方。一遍は大きくやってみるということのも行き方。そこは知っておかなくてはいけません。やるやらんにかかわらない。やらなくてもいい。しかしやればやって意味がある。善根を助成する意味があるんだということはおかなくてはいけません。

真宗の人達が出家して、今まで在家であった人達が出家して色々な講習会を受け、或いは試験を受けて得道してお坊さんになりなされる。それは必ず大きな影響を与える。家族に与え、そ

の周囲に与え、社会に与えるのである。今このような時代に、親鸞聖人の教えに入って出家得道しようとする人がいるという事は、大きな意味を持つているのです。出家を称讃する人を喜ぶ。

(4) 諸仏世尊を善知識と仰ぐ人

「四に、諸仏世尊に於て善知識の想を生ず。よく一切仏法を助成するが故に。」

これはもちろん自ら諸仏世尊を善知識として仰ぐということでありませんが、私のために助成して下さる。又世間の為にとここで大事なことは世尊です。我われは諸仏というよりも、

一仏ということになり易い。自分の先生、自分のよき人、又親鸞聖人、そういう人は善知識として分り易い。

しかし諸仏というのは難しいのです。諸仏というのは七高僧とかそういうお方を申しませう。親鸞聖人は尊敬しているけれども、法然上人は尊敬しないという人は、浄土真宗の中にもたくさんあります。あの人は大体あまり力がなかったではないか。けれども親鸞聖人が非常に尊敬して「法然上人、法然上人」と言っておられるだけであって、力も劣り、悟りも劣っているんじゃない、と言う人はたくさんあるんですよ。そういうのは善知識と言わないのだと龍樹は言った。善知識とは、諸仏世尊に対して善知識と仰ぐ気持ちを持つているのです。

我々の気持ちは非常に小さな気持ちであって、従って、住岡夜晃先生を大事に大事に思う人は、他の先生方はたいしたこと

ないと思う。自分達の先生のほうが上と思うでしょ。こういう考え方は小さいですね。

諸仏なのです。有縁の知識なのです。この人によって大きな世界に出された。共にこれ諸仏世尊なのである。一度殻を破って広い世界を知らない、自分の先生自身がよくわからなくなる。お山の大将われ一人という信仰になってしまう。

その点親鸞という人は徹底した人です。自分の先生のことには『教行信証』には僅か三行しか書かれませんがね。

『選択本願念仏集』南無阿弥陀仏

往生の業には念仏を本と為す」

これを教えられたのです。これが根本ですね。そこから事が始まるわけです。「本師源空いままさずば このたびむなしくすぎなまし」である。それと同時に必ず諸仏世尊において、善知識の想をなす。その諸仏世尊が、私のためにも人のためにも仏法を助成してくださったのである。

人生は出会いであり、教化である

善知識とは何か。一は求道者に対する姿勢。二、三、四は、法を説く人、出家する人、仰ぎ見る世界を持つ人を善知識という。その人に遇ったということが決定的であった。

「初めて善知識の辺にありし時、我を教えて念仏三昧を行ぜしむ。」(一一一八九)

その時にすべての障りを離れて大きな世界に出ることができた。もしこの人に遇うことがなかったならば、私の一生は何

であったであろうか。駄劫多少の間に空しく過ぎたに違いはない。そういうところに駄劫多少をうたつてあるのです。

亡くなられた先生は、人生は教化であると言われた。教化ということとは、善知識に遇うか、悪知識に遇うかである。その人を通して私が教育され、教化されていくのである。悪知識に遇うところに駄劫多生の流転がある。善知識に遇うところに、解脱、出離の強縁が与えられる。

これを言い換えると、人生は出会いである。亀井勝一郎という人は『愛の無常について』で、出遇いについて、出会いの初めは考えるということ。ただばったり出会うのではない。考えるということがある。そして迷うということがある。そして、かくあれかしと願う一念を持つようになる。そこに出会いがある。こういうプロセスがあった。そして出会いとは、一人の友を与えられることであった。

亀井勝一郎は現代語をもって、仏教用語を使わないように努力した人であろうと思いますが、非常にいいところを言っておりますね。出会いといってもぱったり偶然出会ったというのではない。それだけの経緯があるわけである。

マルチン・ブーバーは、出会いについて、「み恵みによって、汝が私に出会う。すべて出会いは恩寵である」と言われる。汝というのは「Du」という。私を「友よ、兄弟よ」と呼ぶ人。み恵みによって私を「友よ、兄弟よ」と呼んでくれる人が私に出会ってくれるのである。すべて出会いはみ恵みである。

亀井氏のほうは人間の方から言った。私が考える、そして迷う、そして是非とも本道の道に出たい、本当のあり方を我が身に得たいという願いを持って進むというと、出会いがあるのだ。出遇いというのは、「ひとつの言葉」を我が身に得る。

我々は直観的にわかる。南無阿弥陀仏、そういうものを頂くのが出会いなのだ。こういふ人に遇った時に、出会いによって私がひとつの言葉を得た時に、眩劫多少の間、出離の強縁知らざりき、今まで長い長い人生空過の旅を送ってきたのである、もしこの人に遇わなかったならば、私はどういふことになっていたであろうかと、そういうことを思うようになっていたのを、眩劫多生の文と云うのである。

一つの世界に出された者はこういう思いを持つと道綽は『安楽集』に説いている。聖人はこれを真の仏弟子のところで挙げられた。従って、真の仏弟子というのは、こういう思いを持つのだということが言われているわけでございます。

二 出離の業縁しらざりき

娑婆は堪忍土

「曠劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき 本師源空
いまさずば このたびむなしくすぎなまし」という和讃を頂
いています。

出離の強縁というのは、迷いの世界を出る優れた縁。それを強縁という。弥陀の本願を言っている。出離というのは出で離れるという。何を出で離れるかという、我々の迷いの世界、自己中心の殻の中に閉じこもっている世界を出で離れるという、そういう優れた縁を強縁という。

出離というところから頂いてみよう。

「光明師の云く、唯恨むらくは衆生疑ふまじきことを疑ふことを。浄土対面して相たがはず。弥陀の撰と不撰とを論ずること莫れ。意、専心にして廻すると廻せざるとに在り。或はいわく、今従り仏果に至るまで、長劫に仏を讃じて慈恩を報ぜん。弥陀弘誓の力を蒙らずば、何の時、何れの劫にか娑婆を出でん。何が今日宝国に至ることを期せん。実に是れ娑婆本師の力なり。若し本師知識の勧めに非ずば、弥陀の浄土云何が入らん、と。」(十二の八十九)

善導の『般舟讚』です。「弥陀弘誓の力を蒙らずば、何の時、何の劫にか娑婆を出でん」そこに娑婆を出るということがある。出離は娑婆を出るということである。

娑婆は忍土、堪忍土という。堪忍は堪え忍ぶという。苦しみ
の世界に於いては、そこでは忍んで生きるしか生き様がないと
いうのを堪忍土という。

誰が堪忍するのかというと二つのことがある。一つは、一切
の人は皆々忍んでいくしかないという。もう一つは、特に教え
る人、教えを授け導いていく人は特に堪忍しなければならいと
このように二つの堪忍が言われている。

なぜ堪忍しなければならないか。それは娑婆を穢土という。
この世の人は煩惱成就である。煩惱具足である。煩惱は貪欲・
瞋恚・愚痴。貪・瞋・痴という。こういうものを根本、因とい
う。これが因となって色々な事が起こってきて、そこに悪業が
起こって苦悩となる。果、苦果である。それを起こす縁が無数
にある。

これを穢土と言い、生死の苦界というのである。生死の苦界
ほとりなしというのである。生死は流転生死と言う。又生老
病死と言い、苦しみを表している。又、迷いを表している。そ
ういう世の中なのである。

生死の苦海

すなわち生老病死、苦しみは人間の世界において免れないも
のであって、人間の苦しみというよりも、苦しみの人間、苦悩
の人生。人生の苦悩というよりも、苦悩の人生。人生そのもの
が苦悩である。

何故か。それは煩惱成就であるからである。煩惱を具足し
ているために、どうしても風が吹いてくると、その煩惱があら

わになつてきて、そこから働きが出てきて、貪欲・瞋恚・愚痴が動いて、色々事を巻き起こして、結局苦しみの世界に落ちる。

その苦を苦果という。四苦八苦という。四苦は生老病死。生は人生苦を言っている。大体この人生苦の中に全部入るのであるが、一応分けて言えば、一つは個人苦である。その個人が問題。体が充分でないとか、体が弱くて病身であるとか、ある能力に欠けているとか、或は劣等感、背が低いとか色が白いとか黒いとか、そういうことも含めまして、個人的な問題で悩むということがある。

そういう果が何から起こるのかと言うと、煩惱から起こってくるのである。深い貪欲、自己自身に貪りついて、貪着して、自分を中心に考えますから、事が苦悩になってくる。

個人的には恵まれているのだけれど、家庭には、親がおり、妻がおり、夫がおり、子供がいる。その中に苦しみがあり、ごたごたがあり、トラブルがある。

家庭は何ともないのだが、職場でうまくいかない。職業が自分に向いてないという事があり、又上の人に認められず、下の者から理解されない、同僚との間がうまくいかない等、色々な問題がある。そこまでうまくいっても、社会という問題がある。

こういうふうその人が生きていく上に、色々な苦勞があるのが生死の苦海である。その上に人は段々と年をとつてくると、年令が増してくると、人生苦とはもうひとつ違ったものが加わってくる。

老苦の一番大きなものは、自分が要らん者になつたのではなからうか、という思いです。自分はもはや、自分の家庭にも、

職場にも、社会にも不必要な人間になつて、要らん者扱いされているのではなからうか。こういう思いは、年をとらなければ出てこない心だと言えるでしょう。そういう精神的なものが大きいのです。

だからしゃんとしなければいけないですよ。しゃんとして生きていかなければいけない。それは自信を持って生きていけと言われるのではないのです。「弥陀弘誓の力を蒙らずば何の時何の劫にか娑婆を出でん」なのです。

苦海を出るとは出離なのです。それは気分や気持ちの持ち方ではないのです。病氣となると、僅かなことにも身が痛み、心が痛むのです。病氣の私に対して誰も同情してくれる人がいない。死を控えているとなると大きな驚きや恐れがある。これらを四苦という。

五苦というのは、愛別離苦が加わる。愛し合っている者が、しかも離れ離れにならねばならない。さらに三つを加えて八苦というが今は省略します。

そういうものは人生にくつついていくというか、それが人生そのものなのだ。何故か、煩惱が因でそういう果が出来るようになっていく。因果というのは離れない、因果不二である。

無生法忍

娑婆は堪忍、こらえていくしかない。特に上に立つ者はじつところこらえていかななくてはならぬ。教える人、上の責任者はこらえていくしかない。それを堪忍土という。

堪忍ということだと思ひ出されるのは、無生忍ということだ。信心を無生法忍という。第三十四の願は聞名得忍の願という。名号を聞く、即ち南無阿彌陀仏の名のりを聞きひらいて、そこに忍を得る。その忍を無生法忍というのです。信心のことを言っている。

信心のことをわざわざ無生法忍と言い換えて、無生法忍を是非とも得させたいというのを聞名得忍の願という。聖人はそれを十二の八十七にあげている。

「設し我仏を得たらんに 十方無量・不可思議諸仏世界の衆生之類 我名字を聞きて菩薩の無生法忍諸の深総持を得ずば正覚を取らじ」

これを第三十四願という。どこに引いているのかというと、そのすぐ前は「真の仏弟子」とある。本願を聞きひらいて金剛の信心を得た人は、「弟子とは釈迦諸仏の弟子なり、金剛心の行人なり」、それを真の仏弟子というのである。

真の仏弟子に忍という事が成り立つのだ。そしてこの娑婆世界、堪忍土という世界において、どのような苦悩があろうともそれを堪え忍んでいく力を与えられるのだ。それがこのところに引いてある。三十四の願が真の仏弟子のところに引いてある。

聞名は名号、無生法忍は無生法、無生無滅、即ち如来の世界、それを一如、如の世界と申します。一如の世界を本当に忍、認識する。無生無滅の世界を認識する。それを無生法忍という。略して無生忍という。

どうして忍が成り立つかということ、無生無滅の世界から南無阿彌陀仏となつてくださって、本願の名号となつて、諸仏、釈尊の教えを通して私に届く。聞きひらくのである。それを特に無生忍といわれる。

それは信心を言っている。信心をなぜ忍というのか。それは、この忍というものがこの人生、即ち生死の苦海を本当に忍んでいけるのである。

喜・悟・信の三忍

忍ぶといえば我々は、歯を食いしばって忍ぶということがある。どんな苦しみも忍んでいかななくてはと考えると、忍んでいくということがあります。

そういう忍び方は体の上でよくないです。胃が悪くなる。胃が悪い人は多いでしょう。医者の方へ行ったら神経性胃炎と言われる。名前はいいけれど、要するに歯を食いしばって忍んでいるということです。その次は十二指腸潰瘍とか胃潰瘍とか、名前は色々付けるけれど大体苦勞が多いということです。胃袋で忍んでいる。胃で忍ぶから胃が悪くなる。顔色も悪いです。

そうではなくニコニコとして忍ぶのです。それを言わんがために善導大師は、この無生法忍とは何かということ、喜・悟・信の三忍と言った。

喜び。歯を食いしばるのではない。喜んでニコニコとなつて有り難うございますと言って、そういう喜びを持つ。そして悟る。大きな世界がわかる。これが私の人生とわかる。そう

いう智慧。明朗さ、喜びと智慧。そして信、自覚。即ち自らが何者であるか、本当に私の煩惱の重さ、業の重さというものがわかる。南無阿弥陀仏、そういうふうにして忍ぶのだ。

そういうものが与えられるのです。本当に大事なところなのです。大事だから親鸞聖人は真の仏弟子の所にすぐあげておられます。

ここが忍びどころとって忍ぶのではない。そうではなしに、如来のおこころが本当にわかる。他力の悲願はわれらがためなりけりなのだとわかる。

人生という舞台は色々な広さがあり、深さがあるが、色々な役割もある。荷物をかついで歩いていく人もおれば、幸せな役割を演ずる人もある。下積みになってフーフー言っている人もあれば、その上を車に乗ってふんぞり返っている人もある。色々な役割がある。さー、私の役割はどうなっているのか。

それがわかった。これが私の人生、これがこの世を生きていく私に与えられた舞台、ここで頑張るんじや、とよくわかった。「これが私の人生」と分かったら、忍とか言う必要はない。

「それをしつかりやり遂げましょう、ありがとうございます」となる。喜びになる、明朗さをもっている。

親鸞聖人は仰った。「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」。ここを劇にしましたら、あそこは抜けれない個所です。さあて、どういう顔をして言うかなあ。

〈笑い〉

ご承知の前進座が「親鸞」を持って全国を回った。広島にも来ました。鳴井さんが見に行つたと言うから、あそこはどうい

う顔をして言いましたかと問うたら、「深刻な顔をして、しかも面をして、地獄は一定すみかぞかし、と言っていました」ということでした。

それはそうでしょう。それしかないでしょう。しかしそうではないのです。あそこは深刻な顔で言うところではないのです。ニコニコニコツとして言わなくてはいけない。「地獄は一定すみかぞかし、なむあみだぶつ」なのです。そうでしょう。

それが忍ぶということなのです。そういう忍びなのです。そういうふうはこの世を忍んでいくのです。それが浄土真宗です。

あれをやつてこれをやつて

我々は「忙しい忙しい、あれもやらんならん、これもやらんならん」と、「もう何と私は忙しいんでしょう」と言っている。そういうことを考えるからそうなるのだ。「あれもやらんならんこれもやらんならん」ではなしに、「あれをやつてこれをやつて」である。そして次々やつていくのだ。それが私の役割。私に与えられた人生。

あの人も相手にしなくてはならん、この人も相手にしなくてはならん、あれもこれもといつていたら身がつぶれてしまいますよ。そうではない。あれをやつてこれをやるんだ。

今ちようど十月の下旬で、最後の大根を蒔く時期なのです。「二年後大根」というのを蒔くと来年の春獲れるのです。冬を越すのです。あまり遅いと伸びないですから、二年後といいながら早めにやつといた方がいいというのは、僕の長年の体験で

す。そういうわけで僕も忙しいんです。大根の種を心配しているのですから。

大根ということになるとやはり種をそろえなければいけないでしょ。いろいろな種を考えますから、あれを蒔いて、これを蒔いて、その次これを蒔こう。あれも蒔かんならん、これも蒔かんならんとなると、とてもじゃないが気分的に参るでしょう。あれを蒔いてこれを蒔いてである。

娑婆を出る

娑婆を出でん。娑婆を出る。出るとは出離、出で離れるである。厭離、厭離穢土という。出てどうするのか。

穢身という。穢身があつて穢土である。穢身が主体であつて、穢土が客体、環境である。穢土を出る、それを浄土という。厭離穢土、欣求浄土という。煩惱を抱えて、貪欲瞋恚愚痴の煩惱のまま出て行つたならば、穢土から浄土に移ろうとも、そこがたちまち穢土になってしまうだろう。

出離ということは離れること。厭い離れる。それは土について言えば出離であるけれども、穢身は同時に転回がなければならぬ。転回して初めて穢土を離れるということが成り立つのである。

どういうふう転回するのか。それを回心と言います。「有漏の穢身はかわらねど、心は浄土に遊ぶなり」と、われわれの身体全体は煩惱を持った肉体をなくすというわけにはいかなければ、心の転回が回心である。回心がなければ、浄土と

いう世界が展開しない。土を出るということは心の転回を言っている。

穢土とはいわば卵である。卵の中が穢身であり穢土である。卵の中なる人生、厚い殻に閉じ込められたわが人生、そこに穢土がある。穢土というのは、一人ひとりがあるような中に閉じ込められているわけである。それが卵のまま、殻の中に入つたままどこかに行こうとしても、穢土はついてまわつて来る。殻から出ること、卵からひよこへ、そこに転回がある。それには、「弥陀弘誓の力を蒙らずば」、それを他力という。そして育てられて、目玉ができて、卵からひよこへとなつて、この殻を出たとき、そこに「娑婆を出る」ということがある。

娑婆を出るといふことはその穢土から出るといふことです。それは必ず菩薩道を生きるもの、眼を持って、本当にものを見る、本当に書物を読む、お経を読む、そして教えを聞く耳、そして聞法のための足、そして念仏のための口、そういうものを持って、ひよことなつて出てくること、そこに初めて菩薩道が展開する。そこに忍というものが生まれるのである。それが出離娑婆ということである。

因と縁と果

弥陀弘誓の力がそういうふうになつてきますのは、信心成就。信心成就が出離の因。縁がはたらいて、往生浄土していくという結果が生まれるのである。そこに出離の因ということがあ

因と縁と果、因縁果ということを考えてみよう。因はたね、縁は条件、由る、縁由と言います。果は結果。風が吹いて海に波が立つ、こういう現象がある。何が因か、何が果か。風が吹いた、だから波が立った。これが普通の考え。仏教以外の考えは全部これです。風が原因、風が吹かなければ波は立たなかった。これは因果という。

仏教は縁という。風は縁である。風に縁りて波が立つ。因は海。海の水、海の水に波が立つ性質がある。海の水が波立つ性質を持っている。風が吹かなくても、大きな船が通れば波が立ち、大きな物が落ち込めばそれによっても波が立つような、海に性質がある。条件一つで波が立つわけである。その条件の中の一つが風であって、風でなくても波は立つのである。

因は海にある。波が立つ因は海にある。それを仏教というのであります。それを内道という。その中に全部元がある。これは非常に分かりにくい。ものすごく分かりにくい。

あなたに問題が起こったとする。あれが悪口を言うから自分腹が立った。あれが悪口を言わさえせんなら私の腹が立つようなことはないんだ。そうではないんですよ。彼が原因ではないんです。

彼は縁。腹が立つのはあなた、あなたが腹が立つようになっているのだ。腹が立つものを持っているのです。あなた全体が、貪欲・瞋恚・愚痴といって、そういう煩惱の持ち主なので。だからあれが言わなくても、これが言っても腹は立つのです。誰が言わなくても自分でも腹が立つのです。そういうものを持っているのです。その自己を問題にしていこうというの

が仏法です。そこが内道というのです。因縁果というののもすごいことです。

出離の因は信心

娑婆を出て、離れて、私が往生浄土していく。これは死ぬことではないですよ。殻を破って出ていく。その因、その縁、その果とは何か。

普通はこう考える、因は弥陀の本願、あるいは名号。南無阿彌陀仏を頂いて往生浄土、すなわち厭離穢土の果を得る。弥陀の本願のお蔭で南無阿彌陀仏を頂いて、それが因となって、私は往生浄土の果を遂げていく。そう思うでしょう。そうではないのですよ。

「弥陀弘誓の縁を蒙らずば 何れの時にか娑婆を出でん」。

弥陀の本願名号が縁、往生浄土が果、それでは因は何か。仏法は何を教えるのか。仏法は全ての問題は私にあるということとを教えるのです。私の中に賜った信心、私の中に信心が成就して、その信心が因で、これがたねです。それに本願の名号が、護り続け、はたらき続けて下さって、往生浄土の果を得るのだ。誰かが来て私を助けてくれたというのではないです。私に信心が成就するということがなければ、往生も堪忍土もその他何もできません。

あなたの信心が大事。もう少しひっくりかえって言ったらあなたが大事。この世の問題を解決できるかどうかというのは、あなたにあるのだ。そこはしっかりしなくてはいけないところです。

我々は他力他力と聞きつけているから、何もかもやってくれると思っっている。ほっといても南無阿彌陀仏で助かっていくのだと思っっている。それも間違いではないのです。しかし、間違いではないのですけれど、それを間違える人がいるのです。「はあ、そうですか、もう何にもいらぬんですね」。こつちも考えて「そうですねえ、何にもいらぬんです」と言うと、「ああそうですか、この身このままですな」。

「あなたの、この身このままというのはどういうことですか」と、時々聞いてみなければいけないですね。「五種正行とか、勤行とか、色々言われるけれど、そんなものはいらぬのであつて、このまま寝とつてもいい」。それとは違うんじゃないや。

「しかし他力というのは純粹絶対他力と言つて、弥陀のはたらしで全部解決するようになっていゝのではないですか」。どこかで食い違つていゝでしょう。信心成就しなければ話にならないのだということが、この人には分かつていないのです。

「信心成就は如来のはたらしでしょう、何もしなくても信心成就できるでしょう」。そんなことはない。だから十九願・二十願・十八願、三願転入ということが言われておつて、十九願の自力の信から出発して、それがだんだんと進展していつて念仏一つとなり、さらに転回して如来のはたらしでございませうと、自己に目が覚めていくわけである。そうでなくては信心にならない。

信心になつた上は、信心が因となり如来が縁となる。ここがなかなか分かりにくい。

今が因と縁と果。言わんとするところは何か。因は内にある。因が外にある、他因、他の因によつて果が得られるというのは仏教とは言わぬんです。自己が主体です。私というものゝが本當に確立しなければ、どうにもならないのです。私が確立して初めて、すべてのものが生きてくる。

だから仏法はまず自己の確立。まず主体の確立。「世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」という一心帰命が私において生まれることが一番大事なことであつて、それを信心正因というのです。

信心が往生浄土の正因ということなのです。弥陀の本願が私の信心の正因なのであるが、往生浄土ということ、私が本當に娑婆を出て転回していくということ、そしてついに往生浄土していくということは、回心によつて信心ができて、そこからひよこが雛になり、鶏になつてくるのである。卵からひよこになるところを信の成就、信の成就は本願の名号が届いてくること、それが根本。他力という。

ひよこになつてから出離ということがある。信がうまれなくてはいけない。その生まれた信が大きく伸びていくということが大事です。

如来の本願が出離の強縁

大分ごたごたした話になつたが、まず出離とは何か。何か出て行くという問題ではない。自分が成長するという問題である。成長しなければ出て行くことにならない。成長するとい

う問題がひとつある。それが回心という問題であり、信の成就という問題である。

卵がひよこになるということが先ず第一。これが無ければどうしようもない。このひよこがだんだん大きくなっていくというところに、弥陀の本願が縁になって、弥陀の本願によって信心が、この種がついに往生浄土していくのである。こういうことになっていくのを出離の強縁という。

出離の強縁とは如来の本願をいつている。逆に言うと、如来の本願力は縁なのだ。出離の縁なのだ。出離の因は信心です。信心が生まれなければ出離ということはできない。因と縁、そういうところが指摘されるところであります。

出離の強縁。強縁は、強い、勝れた縁、出離のための勝れた縁を言う。因ではない。

「本願業力は信心の人の強縁なるが故に増上縁と申すなり」
(十九―五)

本願の業力、略して本願力を増上縁と言うのである。そこに強縁というのが出てくる。

「又云わく「弘願」と言うは『大経』に説くが如し。「一切善悪の凡夫、生を得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為ざるは莫し」
(十二―二十四)

玄義分の言葉です。

「弘願と言うは『大経』に説くが如し」ここは聖人の読みは少し違っていて、『教行信証』では、「弘願と言うは『大経』に説くが如くんば」と読んでもあるけれど、まあ今はこのままにしておきましょう。

弘願というのは『大経』に説いてある。『観経』には説いてないのでありますが、『観経』で頂きますと、「一切善悪の凡夫人」、善凡夫悪凡夫すべてことごとく生を得る。生を得るというのは、それが出離である。出離の増上縁が強縁。出離の強縁は阿弥陀仏の大願業力、すなわち仏願力、本願力を強縁とするのである。縁とする。それを出離の強縁という。それを増上縁というのである。縁である。それに縁るのである。

ならば因は何か。くり返しますように因は信心である。信心正因というのである。信心が成就して本願力に乗じ、本願力によって往生浄土する。

それはどういうことか。歩んでいく主体、往生浄土していく主体は信心の人なんです。その信心の人が、東岸発遣、西岸招喚という二尊の喚遣、「きみよ行け」という励ましと、「汝来たれ」という呼びかけによって進んでいく。それが「縁る」である。縁って、護られて、進んでいくのである。

進んでいく主体は信心の人。それが如来の本願。本願は南無阿弥陀仏。それが招喚。同時にそれが十七願。弥陀諸仏のはたらきによって進んでいくのである。

増上縁―二尊の喚遣

信心の人に与えられる増上縁とは何か。往生浄土していくということは、坦々たる大道を歩くようなものでは毛頭ない。その前にある二河を渡っていくことが往生浄土。そのところをしっかりと考えなければならぬ。往生浄土というのは二河白道である。生を得るとは、出離。これは二河を渡ること。

二河とは火の河水の河、貪欲瞋恚、私の心、その底には貪・瞋・痴というような私の心。これが娑婆を作っている。娑婆を超えていくとは、私の心を超えていくことに他ならない。

その中に白道を賜った。白道が信心、願心である。願力の道、それを渡りきっていくこと、それを生を得ると言い、二河を渡ると言い、これを二河白道と言う。

渡る主体は信心の人。それが生を得る因。それが生まれなければ、白道があるということもないですけれども、たとえば白道があるうとも渡る人がいない。

しかし一人では渡れない。そこに二尊の喚遣。この一道に立つ人が生まれることが因、得生の因、その時に沢山沢山の問題が起こっているのです。その問題に対して、「汝来たれ」、「きみよ行け」。これを縁、増上縁というのです。阿弥陀仏の大願業力というのである。

何が本願力か。本願のはたらき。喚ぶ、「我能く護る」である。「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」である。遣る、「きみただ決定して此の道を尋ねて行け」、励ましである。

初めの方は南無阿弥陀仏、名号のはたらきを言い、後の方は十七願界の諸仏稱讚を言っている。それが縁、それに縁つて進んでいくことができる。縁りて渡る。それが大願業力である。

二尊の喚遣である。

よき師よき友の勧め励ましと、來れ、という呼びかけを言っている。これがはたらき、私の頼りである。

考えてみると、我々が救われていくとはそういうものを持つこと。私を呼び、私を勧めるものを持つこと。それで初めて我々は進んで行けるのです。

五種増上縁

『観念法門』に、五種増上縁ということを使う。私を進める勝れた強力な縁が五つある。

(1) 現生滅罪増上縁（罪が私を妨げない）

私がこの一道を歩きぬく上で、私の躓つまずきになるもの、私をして前進せしめないものは何か。それは罪であります。私の犯す罪である。その罪が、こういうことではいけない、私は本当に分かっていないのではなからうか、私は駄目なのではなからうか、と私を引き止める。

私を引き止める罪にはどういふものがあるか。罪には重いものも軽いものもある。罪は氷山みたいなものである。一番上に出ているものを十悪という。殺生・偷盜・邪淫・妄語・綺語・悪口・両舌・・・そういうものは分かりやすく目立つのであります。その水面下にあるものを五逆という。父を殺し母を殺し、よき師よき友、和合僧、仏身より血を出だすという。その下にあるものを誹謗正法という。

そういう罪が私に見えてくる。私がそういう罪を犯すということになる、「これではいけない、こういうことでは私は駄目だ。」「如来を欺き、如来の前に本当に申し訳ないことであつて、仏法者とは到底言えない。」我々はそういう罪を感ずると、それが私を引き止めるのです。

増上縁、出離の強縁とは何かというと、それは如来の本願力です。如来の本願力は滅罪、現生滅罪、現生においてその罪障を滅してください。そういう如来のはたらきを、出離の強縁と言います。

如来の光明無量・寿命無量のはたらき、本願名号のはたらき、願力が、私の罪を照らし出して「こういう体たらくの愚か者、これが私」と信知せしめる、「これが私」と懺悔せしめる。そしてそのまま、如来の無量の御いのちのただ中に摂めとって、「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」と摂めとってくださるのであって、南無阿弥陀仏である。

懺悔と感謝、南無阿弥陀仏である。これ全体が南無阿弥陀仏となってくる。そこにその犯した罪が、罪として私を引き止めないで、念仏となつて私を前進せしめるのである。それを、現生滅罪増上縁、如来の大願業力という。

タイやビルマの人々は小乗仏教で戒を保つということが非常に厳しい。ビルマの人達はさらに観、内観ということを大事にするのだそうですが、彼らには戒が守れないという悩みがある。観ができないという悩みがある。それがこの人達をとどめて前進せしめないのです。そこで「これでは駄目だ、なんとかしてこれをやらにやあいけない」と言つて右往左往する。そうではない。それは人間としてどうすることもできない、戒を守つていくということ、ほとんど不可能に近い。

それではどうしようもないのか。そうではない。私自身が変わるという道が一つ残っている。できないということが私を行き詰らせている。しかし私が変わるといふことがある。

変わらせしめるもの、転回せしめるもの、回心せしめるもの、それが大願業力である。

どういう形で回心せしめるかというと、私を光明無量と照らし出し、「戒を守れない私、南無阿弥陀仏」、「これが本当の私、南無阿弥陀仏」、「他力の悲願はかくの如きが我らがためなりけり、南無阿弥陀仏」、となる時に、戒を守れないこと、観ができないこと、罪を犯すこと、それらの全てが私を妨げないものになる。それを現生滅罪増上縁というのである。

このことは聖人は、信心の現生十種の益のところ転悪成善の益として出しておられます。

(2)現生護念増上縁(常に照らし護りたまふ)

『観念法門』からの引用です。

「また現生護念の利益を教えたまふには

「但有專念阿弥陀仏衆生 彼仏心光常照是人攝護不捨

總不論照余雜業行者 此亦是現生護念増上縁」

とのたまえり。この文の意は「但有專念阿弥陀仏衆生」といふは、ひとすぢに弥陀仏を信じたてまつると申すみことなり。「彼仏心光」と申すは「彼」はかれと申す、「仏心光」とは無碍光仏の御ころと申すなり。「常照是人」といふは「常」はつねなることひまなくたえずといふなり、「照」はてらすといふ、時をきらはず処をへだてずひまなく、眞実信心の人をば常に照らしまもりたまふ」(一九一四)

正信偈には、「撰取心光常照護」とあります。常に照らし護りたもう、それを「照護不捨」と言っている。

「護」は処をへだてず、時をわかず、人をきらわはず、信心ある人をば、ひまなくまもりたまふとなり。まもるといふは異学・異見の輩に破られず、別解・別行のものにさへられず、天魔・破旬におかさねず、悪鬼・悪神なやます事なし、となり」

(十九―四)

この二河を歩いて行く、進んで行く、すなわち前進していく、生を得る、この道を妨げるものは、一つは我が罪である。もう一つは、異学・意見・別解・別行、そういう外のものである。

内の障碍を滅ぼしてください、外の障碍を取り除いてください。別解・別行というものに邪魔されず、「天魔・破旬」いわゆる他化天の大魔王、「悪鬼・悪神なやます事なし」、何の祟りをする者もなく、引き止める者もない。そういう外から我々が悩まされるといふことがなく、護ってください。

聖人は冥衆護持の益と言われ、諸仏護念と言われ、心光常護と言われ、護られているということはこの所で力説されている。もとは善導にあるのである。

(3)見仏三昧増上縁(仰ぎ見る世界を持つ)

ここに善導はかなりのページ数を割いて論じていて、仏を見てまつるといふことについて、いろいろな経文を引いておられますが、親鸞聖人はこれはノータッチです。一行も引用してない。見仏という意味が、仏を見ると言うけれど、人間我々は、阿弥陀仏を見ることができないわけである。

できないとはどういうことか。阿弥陀仏というのは、目と鼻と口とある、そういう仏様ではない。法を言っている。無量寿無量光の法を言っているわけで、その法身仏を見るといふことは出来ないわけですが、しかし意味がわからなくてはいいけない。

見仏とは念仏である。今は憶念弥陀本願、憶念を言っている。我々は仏を憶念するしかない、憶念念仏である。もう一つ言い換えると、仰ぎ見る世界、われらの仰ぎ見る世界となつてくださって、念仏させてくださる。それが如来の本願である。本願力である。

この道を歩いていくもの、それは火の河水の河の真つただ中にあります、すなわち人生現実の真つただ中にある。それは坦々たる大道には非ず、火の雨、大水というか、私の足をさらうような色々な事が次々起こつて来る。その中を私が進んでいけるのは、私が仰ぎ見る世界を与えられているからである。南無阿弥陀仏と仰ぎ見て、感謝せずにはおられない世界を与えられているところに強縁がある。増上縁がある。それに縁つて進んでいくことができるのである。

尊い人というのは二つのものを持っている。一つは私自身というものを省みる世界を持っている。もう一つは、仰ぎ見る世界を持っている。私が何であろうと、自分の全体を引上げ、仰ぎ見る世界を持っている。そこに如来のはたらきがあるのである。信心を得た人の相があるのである。信心を得た人の上に、そういうはたらきが与えられる。

(4) 撰生増上縁（あるがままを受け取って念仏申す）

衆生を撰することによって前進せしめるのである。

「又曰く「言撰生増上縁者」といふは「撰生」は十方衆生を誓願におさめとりたまふと申す意なり」（十二一六）

おさめとりたまふというのは、撰取不捨という。撰めとつて捨てたまわず、あるがままを受け取って念仏申す、そのことが出来ますことを撰取不捨という。いかなるものも受け止めて念仏することが出来る。それは如来によって撰取不捨されている姿である。これは亡くなられた先生によって非常にわかりやすく、骨身に沁みて分かせて頂いた。

あるがままを受け取って念仏申す。何か撰取不捨といえ、ずつと如来に撰取されて、大きな袋に入れられて、「うーん」と言っている間にパツと浄土にもって行かれて、これが他力だ、などと考えるがそんなことはありません。我々がどんなことでも南無阿彌陀仏でおさめ取られることを言っている。もちろん生きたわが身においてである。

(5) 証生増上縁（信心念仏自体が保証する）

問答がありまして、

「問うて曰く弥陀の四十八願一切衆生を撰して浄土に生ずることを得しむと言うは……これ何人か得生を保証するや」

一道を歩いていくと言うが、得生の保証を誰がしてくれるのか。これ必ず渡るべし、渡るといふのを誰かが保証してくれるのかどうか。そういう問題を証生増上縁という。それは強力な保証があるのである。

「又云く 善悪凡夫をして回心起行して、尽く往生を得使めんと欲す 此れ亦是れ「証生増上縁」なり、と」（十二一五）

善凡夫悪凡夫一切、回心起行のところに、そこに保証が生まれるのである。回心して信を得、起行念仏、信心念仏の中に必ず助かっていくという、往生の自証が生まれる。私に生まれてきた信心と念仏の中に、往生成仏疑いなし、そういう得生の念というものが与えられるのである。

何の保証もいらない。誰が保証してくれるのか。誰もいない。信心念仏自体が保証している、そういうことを述べられている。

以上、非常に分かりにくいところもあり、まだ問題が残っているようにも思いますが、結論は出離の強縁を増上縁という。それが我々を出離するときの縁になるのである。縁とは弥陀の本願、具体的には二尊の喚遣、呼び起こす、それがはたらきなのである。

どういふはたらきをするのか。それは五つのはたらき、五つの利益で表わしている。

私の前進を妨げる罪を転回してください。私を妨げるもの、いろいろな障害から護ってください。私に仰ぎ見る天地を与えて、前進せしめてくださるのである。いかなることが起こっても、それを念仏の中で納めとつていくことが出来る。そして確固とした自信を与えてくださる。得生を信心念仏の中で保証されるのである。

従って、いかなることが起こっても、決して自信を失うことなく前進せしめてくださるものになる。そういうことによつてこそ前進がおこるのである。証を得るのです。

信心を得る道

最後に一番大事なものは、信を得るということである。信心を因としてその人に働きかけてくださる縁、条件、はたらきを言っている。信心が無ければ、昔で言えば棚からぼた餅、夢物語のような話である。何よりも我々は信を得るということが大事である。

信を得る道、それが大事。それをしっかりと心得て歩いていく、歩き抜くこと、それを言っておかなければならない。このことは「眩劫多生の間にも 出離の強縁しらざりき」という講義では必要ないのです。これは信心を得た人のために言っている。しかし言っておかないと手がかりがないだろうと思います。

信心を得る道は二つ大事なところがあると思います。現在お寺に参つても、「信心を得なさい、信心を得なさい、信心が大事」とはみなの人言うところですが。しかし、どうしたら信心が得られるかということ、説いてくださる人はあまりない。だから皆ポカーンとして、よその話のように聞いているのです。富士山の頂上の話ばかりしてくるので、はあ富士山の頂上はああなのかなあと、麓に立って見ているのです。そこに至る道が分からなくてはいけません。それが一番の親切です。

(1)五種正行の実行

五種正行とは、読誦・観察・礼拝・称名・讚嘆供養という自力の行です。

読誦正行とは弥陀の本願に関する書物を読むこと、聞くこと。

僕は時々「あなたどういいう書物を読んでいますか」と聞いてみるんです。

「いろいろな先生の話を読んでいます。」

「いつ読んでいますか。」

「大体」の汽車の中で読んでいます。」

ああいう中で『光明』を読んでも『難思録』を読んでも、場所がよくないね。そういう本を読む所ではないですよ。しっかりと環境を整えて読んだ方がいい。そうせんと読んだことにならない。コの中は新聞がちょうどいい。あんまり考えんで大きな活字で書いてあるから、サーと読めばいいようなものを読んだ方がいい。

読誦というのはそういうものではないです。読誦というのは尊い時間を差しくつて、大事な時間を割いて、その中で集中して読まなければものにならない、感銘は受けられませんよ。

お聖教を汽車の中で読んでいますという人を、偉い人じゃなあ、立派な人だとは僕は思わんです。僕は汽車の中では、考えるか寝るかです。そのほうがいい、読むのには不適當、目がピシャピシャしていけない。

観察、考えなければいけない、考えるということが大事。礼拝、仏様にお参りするということが大事。そして称名、南無阿彌陀仏と念仏申すこと。そして讚嘆供養。讚嘆は、如来のお徳

を讃え、感想発表をし、供養は、如来のみ前にお花を飾りお香をたく。こういうことを実行すること。

大体私を見るところ、信心を得てない人は、五種正行もやらない。「五種正行をやれ」という先生はありません。そこで「念仏申しとるか」ということを先ず聞く。「聞法してますか」「勤行してますか」と、だいたいこういうふうな三つを尋ねましよう。この三つは五種正行を尋ねているんです。あるものを尋ねているんだけど、この一つを聞けば全体が分かる。

私は特に供養が大事だと思います。供養というのは、仏前をお飾りして、お華をあげお香をたいて勤行する。お札をする。これは大事です。そのためにはよいお香をたくこと、我々はけちんぼうでありまして、出来るだけ安いものを買おうと思いますが、安いものにもろくなものはないですよ。これだけは肝に銘じておかななくてはいけない。

一番高い線香ということではない。これは大森先生に伺ったことであるが、「高いからいいというものではない。一寸安くてもいいお香がある」と言っておられました。

お香は、におい、香りです。あるお婆ちゃんに教えてもらって、一番いいお香というのを買いました。その時は福岡市でそのお香がある店は一軒しかありませんでした。その時は「京自慢」という名前で長い箱に入っていました。それは確かにいい値段もいい。

一把百円か二百円位の安いもので済ませようと思わないで、何千円かかろうといいお香をたいてみなさい。それが如来に対する供養ですよ。そしてあなたの求道心の現われ。

大体お香なんかどうでもいいではないですか、そう言いたい。僕も初めはそう思っておった。だが如来を大切に始めると、お香というものを準備するようになるんです。何か関係があるんですね。

これを実行すること。信を得ようと得まいと、そこは如来に任せて、これだけはやり抜くということ、一心継続、継続一貫、これは非常に大事な教えです。

(2) 二河白道の譬

二河白道の譬というものが、我々の進展の道と心得ておくこと。二河白道、これをよく読むこと。二河白道の譬えこそが我等の進展の道なんです。実によく書いてある。あれは善導の実に優れた書物である。

聖人はその全文を『教行信証』信巻にあげられた。そしてなお『愚禿鈔』の下巻の大部分は、二河白道のお譬えについての解釈をされた。ということとは二河白道という中に、人間の信心への道が書いてあるのです。それを何遍も読んでみると、いよいよ信心というものはこういうようにして展開していくのだと分かる。

「すでにこの道有り、必ず度るべし」、渡ろうというところまでが長い。そこまでが信心の道なのだ。群賊悪獣が追っかけてきて、右往左往して苦しみながら、とうとう自己決断を下して行こうと決心する。そこまでが大事なのだ。そこを超えたら大丈夫。そのことをしつかり知っておかなくてはいけない。

いろいろな話になったが大体その二つに尽きるのではないか。そうと腹を決めたならば後は如来に任せて「私は此の道一筋、頑張つていこう」となるところが大事です。そうしたならば、とうとう信心の道に入つて、その信心が正因となつて、その人になつて、護りを受けて、こういう縁をいただいて、前進できるのである。それを出離の強縁というのである。出離の強縁を得るために信心が必要であるということ、最後に申しました。

今回は「眩劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき」とある、その「眩劫多生」ということと、「出離の強縁」ということについて頂きました。

三、本師源空いまさずば

このたび空しく過ぎなまし

空しく過ぎることがない

源空和讃の第四首目の、最後の方を頂いています。法然和讃を頂いた後は、その基礎である『選択集』を頂きたいと思つているところです。この『選択集』を頂きますと、七高僧の歴史を終わることができて、私としては一つのエポックを持つことができると思つています。

第二例会は、土曜日の夜から日曜日の午前午後ということでありまして、泊りがけで来る人はご覧のように多くはないのでありますが、今夜でこの和讃を頂いて、明日は次の和讃に入りたいと思つています。

「本師源空いまさずば このたび空しく過ぎなまし」。もしも本師源空がおいでにならなかつたならば、私がお会いできなかったならば、まことにこのたびの人生も空しく過ぎたであろうという、述懐が述べられている。

「功德の宝海みちみちて」、まことに人生充実して、わが人生空過に非ず、それを「空しく過ぎることなし」と言う。これを反対側から見ますと、本師源空にお会いすることによつて、この人生を充実して生きることができ、空過ということがなかつた、本当に有り難い、ということが言われている。

人生空過、空しく過ぎるとはどういうことか。かねて申すように、人生には「活」と「生」がある。それを活命、生命という。

「活命」は食べていくこと。仕事を持ち、家庭を持ち、その中で金も儲けなくてはいけない、いろいろと付き合いもしなくてはいけない、地位も問題であり、その他、この人生を送つていくというのが活命です。

活命というものは人それぞれに道があり、能力もあり、やり方もありまして、一応やつたという人が多い。そうでない人もある。失意の中で願ひ事かなわず、やることなすことが全て裏目に出て、うまくいかなかつたという人もある。そういう人は、人生何のためにあつたのかということになるかもしれないが、今はもしこの人生の活命というところはうまくいっても、「生」という問題が解決しない。

「生」といえば、生きがいという問題であり、仏法用語で言えば、出世の一大事という、あるいは後生の一大事という。こういう問題が解決しないと、活命がどれ程成功し、とんとん拍子、金も貯まり、子供の出来もよく、家も建て、その他その他うまくいこうとも、人間は最後に、「何の為に自分の一生はあつたのだろうか、私は何の為にこの世に生まれてきたのであろうか」、と思うようになる。活命にはそういうものが欠落している。その時に人生空過ということがある。

石油で大財閥を作つたアメリカのロックフェラー一世という人の写真がある。彼は石油で買占めとかいろいろな事をやつて非常に大きな財を築いた。又エジソンという人がある。彼はいろいろな物を発明したが、何一つとして特許を取らなかつた。全部を公開して皆が使えるようにした。

二人の写真を比べた時に、エジソンはニコニコしてとても明るい顔をしている。ロックフェラーは暗い陰惨な顔をしていて、とても対照的である。エジソンは、私は人々のために尽くすことができたという生きがいを持っていたのであろうか。ロックフェラーは「活」だけでは本当に満たされないものがあった。そういうところに人生空過というものがあろう。人生空過をこえるのには、本当の生きがい、仏教では「後生の一大事」というようなことが問題にされねばならない。

正定聚不退の人

人生空過に非ず、人生を充実してこのたび空しく過ぎたというこのない生き方とは、正定聚不退ということと代表される。正定聚不退の世界に出る。教行至り届いて信証を生じて、南無阿弥陀仏を本当に頂戴して、信心念仏の世界、現生正定聚、必至滅度という世界を与えられる。それが信心であり、人間の一番充実した姿です。

正定聚不退とは具体的にはどういう内容かというところ、聖人はそれを証巻にあげられた。そこに正定聚不退の菩薩の姿を『浄土論』、実際は『論註』からあげられている。

(1) 妙声功德（教えを聞くことができる）

『浄土論』に曰く「莊嚴妙声功德成就」とは、「偈」に「梵声悟深遠・微妙聞十方」と言えるが故に。これ如何ぞ不思議なるや。『経』に言はく。若し人ただ彼国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生れんと願ぜんものと、亦往生を得るも

のとは、即ち正定聚に入る」と 此は是れ国土の名字仏事を為す、安ぞ思議す可けんや」（十二一一一九）。

まず第一は、妙声功德。妙声とは、弥陀の浄土、如来の大きな世界の声、その教え、梵声の悟らしむること深遠なり。微妙にして十方に聞こえる、その清浄のみ声を聞く。

人生を空過せず、人生を充実して生きる、そういう内容とはどういうものかというところ、仏法用語で言えば正定聚不退の身となること、その内容から言えば教えを聞くことができる、即ち教えを聞く耳を与えられることである。説いて下さるお方があり、私に語りかけてくる声がある。そういうものを持つているといえることが人生空過しない第一なのです。

現代という時代は激動の時代であるといわれる。激動というのには、思いもかけないことが起こってくる時代ですね。この中をどう生きていったらいいだろうか、どう生きていったら間違いないか、誰も方法がわからないような時代になった。

今十一月ですが、十二月になるといろいろの新聞などが今年を振り返ります。私は『光明』の一月号に原稿を書かなくてはならない。「新年を迎えて」というのを十一月の初めに書かなくてはならないのは大変ですよ。まだ終わつてもいないのに今年を省みるのですからね。

しかし今年は大変な時でした。天皇は亡くなるし、昭和天皇は大変な時代を生きて本当にご苦労でした。消費税問題で内閣が倒れたり、総理大臣の交代等様々なことがありましたな。これもいつまで続くか。これは日本のことだ。

中国では天安門で思いもしないことが起こった。何年前かに中国に行った時は、そういうことは夢にも思わなかった。平和な国になったなあと思んだところが、何が起こるか分からない。天安門に何万人も集まっているところを戦車で轢いていくと。そういうことがありうるかと思うが、大変なことがあるいろとありました。

地震も起こるし、十一月になったらドイツの壁がくずれてしまった。まあ何ということが起こったのだろう。まだまだ何が起こるか分からない。まだ起こるでしょう。起こっても不思議ではない。

こういう時代をどう生きていいか。しかし、何にも我々は恐れる必要はない。それを正定聚不退というのです。人生が充実したらどつちに転んでもちつともかまわない。

先ず第一に教えを聞く耳を持っている。どんな中でも、梵声の悟らしむること深遠なり、どんな中にも私に届いてくださるみ教えがあり、それを聞く耳を与えられており、妙なる清浄微妙の教えを聞くことができる。動乱の中にあつてまったく動乱を超えた世界を教えていただくのである。それを妙声功德という。本当によかった、本当に身の幸を思うことであります。

(2)主功德（主を持っている）

第二は、

「莊嚴主功德成就とは、偈に正覚阿弥陀・法王善住持と言えが故に。これ云何ぞ不思議なるや。正覚の阿弥陀、不可思議

にまします。彼の安樂浄土は、正覚の阿弥陀の善力の為に住持せられたり。云何が思議することを得べきや。「住」は不異・不滅に名く、「持」は不散・不失に名く、不朽葉を以て種子に塗るに、水に在くに爛れず、火に在くに焦れず、因縁を得て即ち生ずるが如し。何を以ての故に、不朽葉の力なるが故なり。若し人一たび安樂浄土に生じ、後の時に意に「三界に生じて衆生を教化せん」と願すれば、浄土の命を捨て、願に随いて生を得。三界雑生の中の水火の中に生ずると雖も、無上菩提の種子、畢竟じて朽ちず。何を以ての故に、正覚の阿弥陀の善住持を逕るを以ての故なり」(十二—二二〇)。

主功德成就というのは二つあって、一つは私が主を持っている。主はあるじ、王ともいう。法の王であり、法の主である。私はその主に仕えたと共に、主のために命を捧げていこうというような御恩を頂いている。主を持っているということは私の中心である。

仏法を主とし世間を客人とするということもあるが、私の王を持つ、すると私は臣であり、それに仕え、それに捧げ、それに向かつていく、そういうものを持っている。それを主を持つというのである。

「住持」、たもたれている。たとえば種に不朽葉を塗ってもらうように、それはどこに行つても朽ちることがない。それは不朽葉によつてたもたれているのである。私がどのような地獄の真つただ中、三界雑生の水火の中に落ちていっても、焼かれ滅ぶことがない、主によつて住持されている、たもたれているのである。

南無阿弥陀仏でたもたれている。南無阿弥陀仏によつて護られており、南無阿弥陀仏によつて住持されている。それが人生が充実しており、空過でないことである。そういうものが与えられている。

(3) 眷族功德（友が与えられる）

次に「莊嚴眷属功德成就」。眷は愛する、属は私と深いつながりがあることである。そこで眷属とはよき友、御同朋御同行を言っている。

「莊嚴眷属功德成就」とは、偈に如来浄華衆・正覚華化生と言えるが故に。これ云何ぞ不思議なるや。凡そ是の雑生の世界には、若しは胎・若しは卵・若しは湿・若しは化、眷属若干なり。苦楽万品なり。雑業を以ての故なり。彼の安楽国土は、是れ阿弥陀如来正覚浄華之化生する所に非ざるはなし。同一に念仏して別の道無きが故に、遠く通ずるにそれ四海之内皆兄弟と為すなり。眷属無量なり、いづくんぞ思議す可きや、と。」

沢山たくさんの友がいる。その友を御同朋御同行という。私に沢山たくさんの友が与えられている。それは如来浄華の衆である。如来の教えを聞くことによつて友が与えられる。

その友は私を勧め励まし、私の手本になるようなものを持つており、私を護り、私を正しく評価してくれる。それを眷属という。それを与えられている。

友は与えられるものである。如来によつて与えられるもの、それを本当の友という。そういうものを持つていているということとは、まことに人生の充実である。

その人は、勧め、私を勧め励まし、証、この道の正しいことを証し立て、護、私を護り、讚、私を讚嘆し、私を本当に評価してくれる。それを勧証護讚という。

人生の充実とは何か。それは語る友があるということである。生きているお方もある、そこで電話をかけたたり手紙を出したり話し合ったりする、そのような友もある。既に亡くなった人もある。しかし亡くなくても、我々は心の中で言葉を交わし、その人を思い出して憶念し、心の中で話し合うことができる。遠く遠く、いわゆる何千年の昔の人もある。その人の書物を読み、その人を教えを聞く時、その人に「まったくよく教えて頂きました有難うございました」とお礼を言うことができる。

過去現在にたくさんたくさんの友を持つている。そういうのを人生の充実、人生空過に非ずという。四海之内皆兄弟というのはそういうことになっている。

その次は

「又言く。往生を願う者、本は則ち三三之品なれど、今は一二之殊無し。亦溜瀝しじょうの一味なるが如し、いづくんぞ思議す可きや、と」

三三九品、すなわち上品中品下品、それが上生中生下生とあつて、いわゆる善機悪機、たくさんたくさんの差別の中に入った。みんなそれぞれが違つておりました。けれども今や信心を頂き、念仏の道に立たせていただく何の変わりもありませ

ん。みんな我が友です。性別を超え、年令を超え、学歴を超え、職業をこえて友なのであります。

それは溜澗の一味、溜も澗も川の名前です。そういう川があつて、それは流れも水も違つていたのであるが、本願の海に入ったならば、みんな同じ味わいになつていく。そのようにもとは違つていてもみな同じになるのである。如来の同じ仲間になるのである。

そういう友は如来によつて与えられる。それを、「如来浄華の衆は正覚の華より化生す」という。正覚華から生まれてくる。友を作ろう、友を得たいと思つても、なかなかできるものではありません。けれども何才になつても浄土の友というものはできるのである。そしてわが人生を満たしてくれるのである。

(4) 清浄功德（転悪成徳）

そして四番目には「莊嚴清浄功德成就」。

「又『論』に曰く。莊嚴清浄功德成就とは、偈に勸彼世界相・勝過三界道と言える故に。これ云何ぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繋業畢竟じて牽かず。則ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。いづくんぞ思議す可きや、と。」

清浄功德というのは浄化してくれるのです。すなわち煩惱を断ぜずして涅槃分を得るといふ。転悪成徳という。我ら尽く煩惱を断ち切ることあたわず、貪欲・瞋恚・愚痴の泥だらけであります。如来浄土のお徳によつて、その煩惱がものを言わずに浄化されていくのである。

転悪成徳。水多きに水多し、障り多きに徳多し、というように、浄化してくださるのである。又浄化されていくのである。失敗が念仏になり、悪業がかえつて念仏の種となる。そういうところに、私の人生は駄目だったということがない。私の人生は失敗だった、空しかったというようなことは毛頭ない。そういう徳を与えられる。

それが人生空過に非ず、正定聚不退、それが信心の徳である。徳ははたらきである。信心の徳を現生十種の益という。それを十に分けて言われたが、今は一言で言う、正定聚不退という。入正定聚の益ということに締められている。その内容を四つ聖人は明かされた。うかがつてみると本当にそうである。

充実した人生

私の人生は何によつて充実するのかというと、教えです。教えを聞くことができる。教えを聞いてよかつたと思ひ、なるほどそうだと思ひ、本当に有り難いと思ひ、ああ本当に自分というのには浅ましいことであると懺悔し、充実したいと思ふ。

僕はテレビをジーと見てる人を見ると、情けないなあと思ふんです。切つてやりたいけれど、切ると困るだろうと思つて切るわけにもいかない。何とまあくだらんものを見て、と思うが、本当につまらないのかどうかは僕は見たことがないから、内容や筋はよくわからないのですが、まあ大体今までの経験です。

ああいうのは面白い所もあるけれども、教えを聞くという楽しみが分かつたら、本を読む、聖典を戴く、全集を読む、そういう喜びに比べたら、全然話にならん。だからよほど暇がない

限りテレビは見ない。ニュースとか、シルクロードなどは行ったことがないから、どうかなあと関心がありますが、ドラマなどはほとんど見ません。

妙声十方に聞こゆ。梵声の悟らしむること深遠なり。本当にその通り。よかったと思います。本当に教えを与えられてよかった。そういうことがある。

今とても忙しいんです。報恩講がありました。一週間の講習というのは大変ですよ。亡くなられた先生はようやくやささったですねえ。二十八時間話さなくてはならんです。二十八時間というのは大学の教授として一年分です。大体それくらいです。それに巖松会館の報恩講が三日間あり、その準備もしなくてはならん。だから忙しい。

けれどもそういうものが重い重い負担になって「困った困った、忙しい忙しい」と言っているかというそうではないですよ。ニコニコしながら「忙しい忙しい」と言っているんです。

なぜか、それは名声功德を頂くと、今まで分からなかった所が少し分かるようになり、今まで聞けなかったことが聞けるようになる。私が仕える相手を持っている。「このことのために私の人生はあるんだ」ということが分かった。これは大変なことです。

友がいる。あちらに行っても友がおり、こちらに行っても友がいる。その友が励ましてくれ、私の言うことを批判してくれ、いろいろと勧めてくれるというのは、これまた嬉しい話です。そしてどんな失敗も、どんなつまらんことも、それが念仏に

なって生きてくださる。悪かった、しまった、ということがとうとうなくて、生かして頂く。

それがすべて如来のはたらき。それが悉く、法然上人のおかげである。「本師源空いままさずば このたび空しく過ぎなまし」。信心の徳も如来のおはたらきも、元に返して言えば、本師源空にお会いしたことによるのであって、「本師源空いままさずば このたび空しく過ぎなまし」こういう切実な思いというものが述べられています。

善知識は光明となって私を照らす

そのように信心の徳を頂き、如来のおはたらきを頂いたのでありますが、光明名号のはたらきが、わが信心を成就してくださるもので、名号が信心の因、光明が縁ということで、「光明名号顕因縁」と善導大師のところで言われている。

名号が信心の因、光明が縁である。

その光明が本師源空、よき師よき友である。よき師よき友を光明と言うのである。よき師よき友のはたらきを、光明の御はたらきと申すのである。

名号は南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏のはたらきである。南無阿弥陀仏が届いてくださって、いわゆる信心が生まれるのでありますが、それが届く縁はよき師よき友にある。それが本師源空である。本師源空いままさずば、どうして名号を頂いて信心の世界に出ることができようぞ。そこでどうして人生充実して生きることができようぞ。本師源空いまして初めて、

このたび本当に人生を満ち満ちて生きることができたという喜びです。

光明は具体的には善知識のはたらきである。光明に譬えられるのであります。

「又云はく。光明・名号の因縁といふことあり。弥陀如来四十八願の中に第十二の願は「わがひかりきはなからん」とちかひたまへり。これすなわち念仏の衆生を攝取のためなり。かの願すでに成就して遍く無碍の光明をもて十方微塵世界を照らしたまひて衆生の煩惱悪業を長時に照します。さればこの光明の縁にあふ衆生漸やく無明の昏闇うすくなりて宿善のたね萌すとき、まさしく報土に生るべき第十八の念仏往生の願因の名号を聞くなり」『執持鈔』（二十四―三）如来の光明のはたらきは、第十二の願に光明無量と誓つてあつて、まず照らして育ててくださる。それを照育という。「衆生の煩惱悪業を長時に照らしまして」、「衆生漸く無明の昏闇うすくなりて」、自己中心の深い殻に閉ざされ、仏智疑惑の黒闇、暗い闇の中におつた者が段々とそれが薄れてきて、宿善のたねが萌す時、南無阿弥陀仏の名号を聞くのである。そういう表現になっている。そこが大事なところだ。

名号が至り届く場

名号を聞く。南無阿弥陀仏が至り届く。至り届くには、そこに至り届く場ができなくてはいけない。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と南無阿弥陀仏の話をどれだけしても、なかなか届かないんです。それは届く場がないんだ。

雨はザーザー降っている。バケツはたくさん並んでいる。だがそのバケツに一滴の水も入らない。なぜかというとそのバケツはみな下を向いている。お尻の方を上にして下を向いているから一滴も水が入らない。

降る雨が届く場ができなくてはいけない。南無阿弥陀仏が届く場、バケツが上を向かなくてはいけない。バケツが上を向くとは場ができること。光明が照らして照らして、段々と無明の闇が開かれて上を向くのである。上を向くのはバケツが向いたのではない。光が照らして向けるのである。

それは具体的にはどうということかと教えです。教えを聞いて段々と自分自身が分かるわけです。ああ自分は本當にお粗末な者だなと分かる時に、南無阿弥陀仏が至り届く場ができたわけです。

それは誰が説いてくれるのか。善知識です。そのよき人が説いて下さるが、初めはとも受け付けはしなかった。それが段々と無明の闇が開かれてきて、はあ、そうだなあ、仰る通りだ、問題は内にある、因は内にあると分かかって来た時に、如来の名号、南無阿弥陀仏が届くようになるんです。

光明の縁と名号の因

二つあるわけです。届くのは南無阿弥陀仏、けれども南無阿弥陀仏が届く場ができなくてはいけない。場を作るのは光明。それをお育てという。育てられるのです。育てられるのはよき師による。よき師は如来のおはたらきをこの世に於てはたらいてくださるお方である。

「宿善のたね萌す時」とある。ここは大変大事な所である。名号の届く場所が宿善のたね萌す所、場所がお育てによつてできる。それが光明のはたらき。よき師よき友のはたらき。具体的にはそういうことになるのです。

一つには宿善、二つには善知識。宿善開発して善知識にあう。三つには光明という。この光明には二つのはたらきがありまして、一つは、善知識を通して宿善のたね、いよいよ萌していく。光明が善知識の教えを通して育てていく、お育てです。

もう一つは照破する、照らし破るという意味を持つている。光明が照育、照育はやがて善知識の教えを通してついに私を照破する。私の本当のところを照らし破る。照らし破るといのは実際は名号が届くということであり、そこに信心がある。そして南無阿弥陀仏となるのである。照育と照破は兼ねています。

今言いたいことは、二人がかりなんです。二河白道はその点よく表わしているが二ついるんだ。父と母とも言える。今は光明と名号によつて場がでなくてはいけない。

『口伝鈔』(二十五―二) 最後の行から読んでみましょう。

「光明・名号の因縁という事。十方衆生のなかに浄土教を信受する機あり、信受せざる機あり。いかんとならば『大経』のなかに説くが如く、過去の宿善厚き者は今生にこの教に値うてまさに信受す。宿福なき者はこの教に遇ふといへども念持せざればまた遇はざるが若し。「欲知過去因」の文の如く、今生の有様にて宿善の有無あきらかに知りぬべし。

然るに宿善開発する機のしるしには、善知識にあうて開悟せらるゝとき、一念疑惑を生ぜざるなり。その疑惑を生ぜざることとは光明の縁にあう故なり。もし光明の縁もよほさずば、報土往生の真因たる名号の因をうべからず。

いふこゝろは 十方世界を照曜する無碍光遍照の明朗なるに照らされて、無明沈没の煩惑漸々に融けて、涅槃の真因たる信心の根芽わづかに萌すとき、報土得生の定聚の位に住す。即ちこの位を光明遍照・十方世界・念仏衆生・撰取不捨と説けり。」

光明の縁もよおさずば、名号の因うべからず。光明によつて名号が届く、そのところが整備されないとその名号の因は届かない。いうところは、光明に照らされて、信心の根芽わづかに萌すとき、名号の因、定聚の位に住す。こういうふうに頂くべきであろう。

光明に照らされて、前では「宿善のたね」萌すと言い、こちらでは「信心の根芽」萌すという。何もかにも与えられるのではない。内にあるものが出てくるという一面がある。光明によつて内にあるものが萌してくるのである。それが名号のはたらきをもつて萌してくるところに、南無阿弥陀仏が至り届くのである、とこういうふうな表現になっている。

何にもないのが出てくるのではない。何か動いてくるのである。それは具体的にどうということか。それを光明・名号のはたらきという。

信心の根芽萌す

宿善の種、信心の根芽とは何か。これについては私の感想であります。『唯信鈔文意』（二十一七）を読んでみましょう。

「涅槃」と申すにその名無量なり。くはしく申すに能はず。おろおろその名をあらはすべし。涅槃をば滅度といふ、無為といふ、安樂といふ、常樂といふ・実相といふ、法身といふ、法性といふ、真如といふ、一如といふ、仏性といふ。仏性すなはち如来なり。この如来、微塵世界にみちみちてまします。即ち一切群生海の心にみちたまへるなり。草木国土ことごとくみな成仏す、と説けり。」

「この如来微塵世界にみちみちてまします。即ち一切群生海の心にみちたまえるなり」。この如来なのです。

大いなる世界、大きな大きな世界。それは「涅槃」と言われ、「滅度」と言われ、「仏性」と言われ、「真如」と言われ、「一如」と言われる、どうしようもないような大きな大きな世界。その中にわれらはいる、小さな存在である。

その大きな世界を「仏性」と言うが、それが、いとも小さなものの中に満ち満ちているのである。それを「一切衆生 悉有 仏性」と言い、今は「一切群生海の心にみちたまへり」と言う。それを「如来性」と言うのである。

これは何の役にもたたない。何故か。それは人間の心の中でいわば凍結されている。無明煩惱の中に閉ざされていて、「仏性」と言うも「涅槃」と言うも動かない、はたらきを持たない。

そこに光、如来の光明、実際には善知識の教えを通して、だんだんと聞いているうちに、調熟、その無明の闇が次第にほぐれて、次第に薄れて、中の根芽がわずかに萌す。

それが、一切群生海の心にみちたまえる如来の性。無量の光明をもって十方微塵世界を照らしたまいて、衆生の煩惱悪業を長時に照らします。そこに「宿善の種萌す」。

萌すというのは動いてくる、萌え出ることを言っている。今まで凍結されて、無明煩惱の中で冷凍のようになって何の役にも立たなかった。それがようやく動き始めた、少し動き始めた。信心の根芽、それが動き始めたところに届くものが南無阿弥陀仏。そこに至り届いてくださって、それが信心となっていくのである。そういうことを言っておられるのだと思います。

その辺は余り詳しく書いた書物が無いので、ここを何べんも読んでみて、こういう趣ではないかなあと思います。

善知識の之恩

仏法では、何にも因がないところにもものが出てくるという説、無因説を嫌がるのです。中にあるものが動いてくるのだと、これが仏法の論理です。信心の種を私たちは持たない、如来が全部来たって私の信心になってくださる、それはそうなのですが、それが届く場があるわけです。それは一切群生海に満ちたまえる如来の性がわずかに動いてくる。それが仏教の道理から考えると一番考えやすい。

そこにいわゆる名号と光明のはたらきがあつて、光明のはたらきは具体的には善知識による。善知識の教え、そのお照らし

によって、長い間私を育ててくださることによって、私の内なるものが動き始めるのである。そこに、南無阿弥陀仏の呼びかけが届いてくる。そこに信心が生まれてくるのである。

そういうことが根本にあつて、「本師源空いまさずば」、南無阿弥陀仏の本願あり、名号あり、四十八願があろうとも、「本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし」。

この人にお会いし、私が本当に育てられるということがなかったならば、どうしてその南無阿弥陀仏が私に届いて生まれ出よう。そういう御恩を非常によく表わしてあります。

「眩劫多生のあいだにも 出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば このたびむなしくすぎなまし」という和讃をこれで終わります。